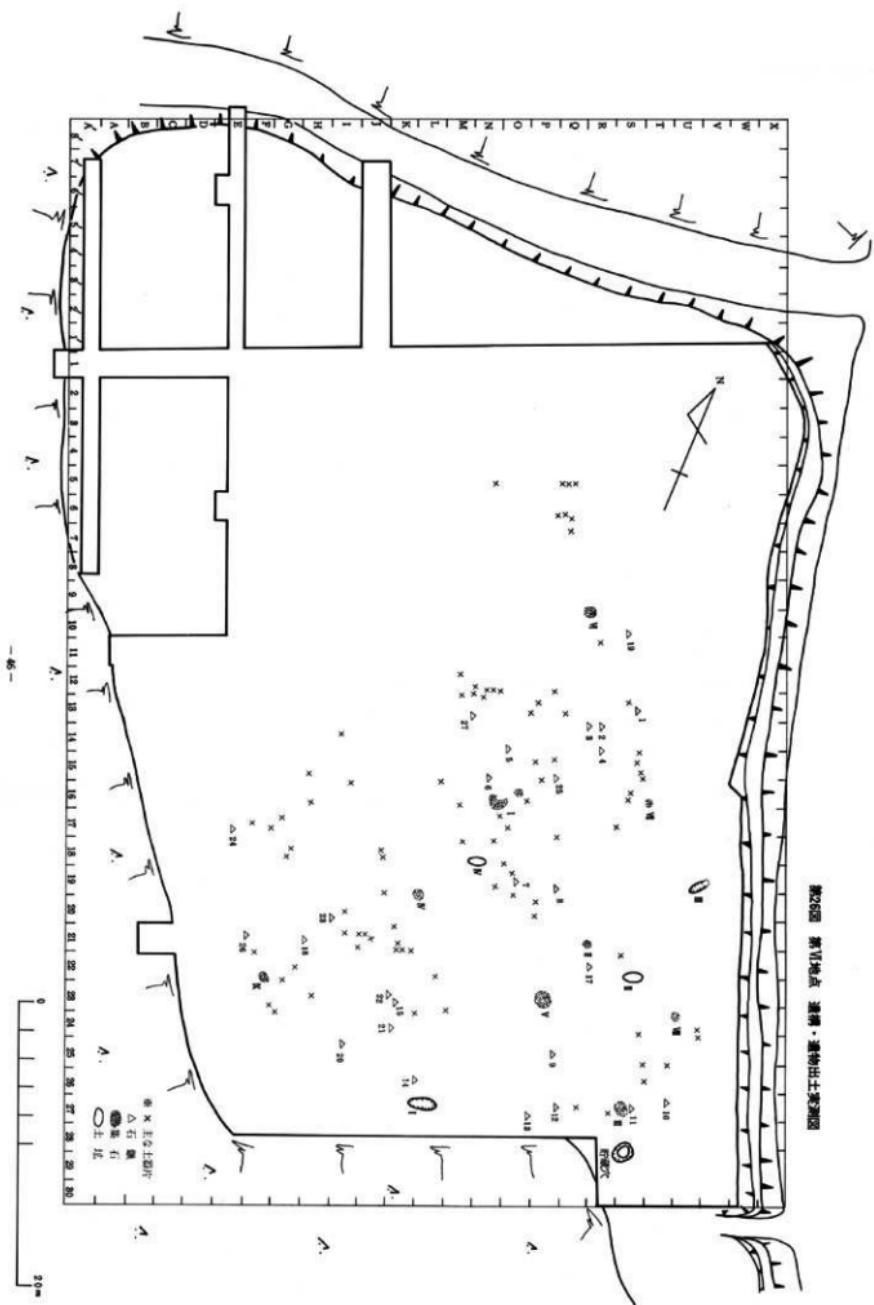


图262 第Ⅳ地点 通称·遗物出土实测图



3 通 構 (第26, 28, 29, 30, 31図)

V地点をほぼ全面調査した結果、第Ⅱ層を削平すると、第Ⅲ層の灰青色土層の直上に縄文時代前期の土器片が出土した。これらの土器片に伴う遺構として、安山岩を使用した集石や不整楕円形、隅丸方形の土括が発見された。集石は総数10基を数え、土括は不整楕円形1基、隅丸方形²⁴基を数えた。分布をみると、土器や石器が出土するとの重複する分布状況を示す(第26図)台地の中央部ないし東側、南側に位置する。なお、この地点については住居址あるいは、それに関連するピットなどを推定して、集石や土括に付属する遺構も考えられ、周辺の発掘調査特に丹念に行なった。しかしながら、住居址やピットなどは全く見られなかった。また、遺物の出土状況も完全な形では残っておらず、破片のみであった。以上のとく第V地点において明確な形で残存する遺構は次のとくである。

A 集石群

第Ⅲ層の文化層には、土器や石器類の他に多数の自然礫が発見され、それらの礫は、入為的に一ヶ所に集められた集石を形成している。集石はⅢ類に大別できる。A類—掌大の礫を立体的、あるいは円形にまとまっているもの。B類—掌大の礫が平面的、あるいは散在しているもの。C類—主に幼児の頭大の礫や掌大の礫を並用したものとに分類される。集石10基については下表のごとくである。

番号	地 区	長径×短径 (cm)×(cm)	形態	礫 個 数	備 考
I	O-16	140× 70	B	70個前後	第28図 図版六
II	R-12	50× 50	A	42 タ	凹石混在 第29図 図版六
III	S-27	80× 60	B	50 タ	石鐵混在No.11 第30図 図版七
IV	C-19	40× 30	B	20 タ	第30図 図版七
V	P-23	150× 120	C	80 タ	寒ノ神式土器混在 第31図 図版六
VI	R-9	80× 40	B	28 タ	凹石混在 第30図 図版六
VII	T-16	60× 60	A	70 タ	A類の典型 第31図 図版元
VIII	V-24	60× 50	B	25 タ	第31図 図版元
IX	F-22	50× 50	B	42 タ	第31図 図版三
X	O-16	80× 70	C	38 タ	C類の典型 第31図 図版三

第27図 第V地点 集石一覧表

集石Iは、本格調査前の巾2mのテストトレーンOを掘り下げた時に最初の縄文時代前期に伴う遺構として確認されたものである。台地のほぼ中央に位置する。ほとんどが安山岩を使用し70個前後の掌大の礫を数える。集石の中央は「コ」の字型に空間をもち長短径70×40cmに広がりをもっている。比較的まとまっているが、中央部の空間は作成的に行なわれたかどうかは判断しかねるが、B類に属する。集石IIはR-12より発見された。長短径約50cmにまとまりをみせば門

形を成す。挙大の安山岩の自然石を使用している。又、集石内の東側よりに長さ15cm、巾11cmの平板石が他の円礫に三方を囲まれた様な形で発見された。A類に属す。礫は火熱をおびていると思われる。なお集石中に凹石(第41図1,2)が混在していた。集石ⅢはS-27より発見された。長短径80×60cmの楕円形を成し挙大の自然石を使用し、集石としては一応のまとまりを成すが、四方に散在している礫もみられB類に属する。又、集石の東側に石塚(第39図-11)や土器片も出土した。礫は火熱

をおびているものと思われる。集石ⅣはC-19より確認された。他の集石に比べ礫の数が少なくわずかに20個前後の自然礫が集中していた。40×30cmのまとまりをもっている。B類に属する。集石VはP-23より出土した。5個の幼児の頭大の礫と挙大の礫75個前後を数え他の集石より最も数量が多い150×120cmの広がりを持つが、まとまりがなく散在している。B類に属する。集石VIはR-9より出土した。巾80×40cmに28個の小角礫が散在し、バラツキを見る。C類に属する。集石VIIはT-16より発見された。平面を60×60cmのほぼ円形を成し挙大の自然礫70個前後を立体的に集めている。この集石は他の集石と比べ最も保存の良い状態であった。A類の典型である。こ

第28図 第VI地点 集石I号実測図



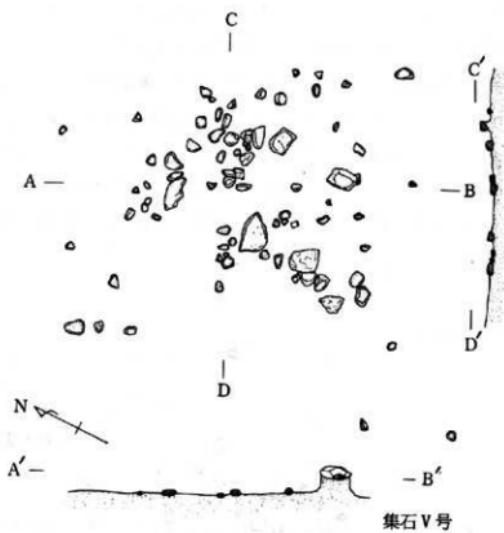
第29図 第VI地点 集石II号実測図

これらの礫は火熱をわびていると思われるが、周辺からは木炭、灰の遺存は認められなかった。集石ⅢはC-24より発見された。挙大の礫24個を巾60×50cmに集めている。統一性はなくバラツキをみる。B類に属する。集石ⅣはF-2より出土した。挙大の礫、24個が50×50cmの範囲に集中しているものの、空間をもった集石である。集石ⅩはO-16に発見された。集石Ⅰの北側に隣接している。長短80×70cmの広がりを持ち、幼児頭大の礫を主に使用している。計38個を数える。他の集石とは、似たような形をもっていないが、礫の大きさに差異が認められる。集石中央部に空間をもっている。これらの角礫も火熱をおびていると思われる。C類の典型的なものである。

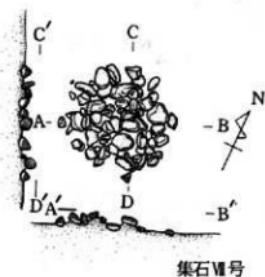


第30図 第VI地点 集石III・IV・VI号実測図

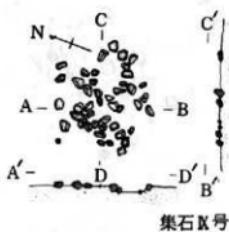




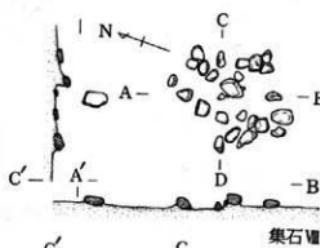
集石V号



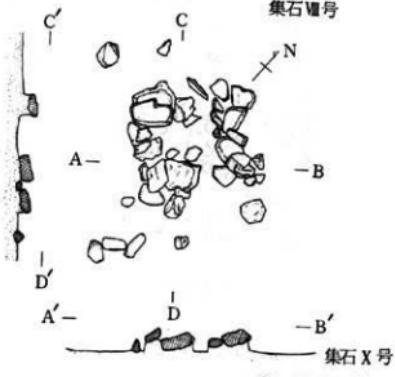
集石VII号



集石IX号



集石VII号



0 50cm

第31図 第VI地点 集石V・VII・VIII・IX・X号実測図

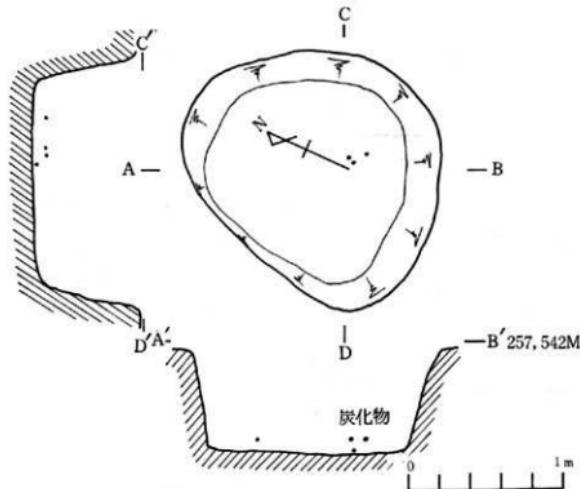
B 土塁

(1) 貯藏穴 (第32図)

第VI地点の南東部、台地末端部のS-28に円形の土塁1基が発見された。長径170cm、短径147cmの南北に細長い不整規円形の平面プランで、壁高約68cmを計測する。すり鉢状の土塁である。植物遺存体—堅果類の炭化物3個、漿果類1個が検出された。

イチイガシ（ブナ科の堅果類）	1	12.5×9.2mm	1個体
	2	11.3×9.2mm	半分欠失
	3	12.1×10.3mm	半分欠失
サクラ属（バラ科の漿果類）			10.5×9.5mm

イチイガシの表皮は剥落し、きわめてもらい。

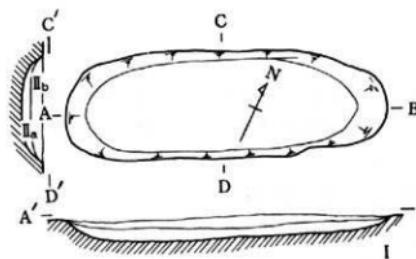


第32図 第VI地点 貯藏穴実測図

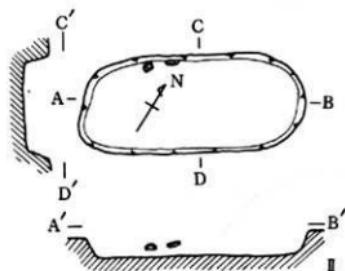
(b) 隅丸方形土塁 (第33図 1・2・3・4)

地 点	長 径 (cm)	短 径 (cm)	深 底 (cm)	長軸 方向
I L-27	255	87	19	N-66°W
II S-22	181	76	20	N-58°E
III C-19	200	77	17	N-32°E
IV H-18	204	86	26	N-32°W

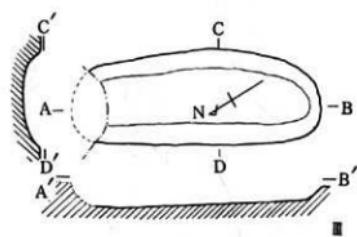
台地の中央部、東、南側に5基の土塁を確認した。分布状況は、集石群と似たようなパターンをとる。土塁内には遺物の出土はなく特記すべきことはなかった。以下、若干の説明を加えておく。



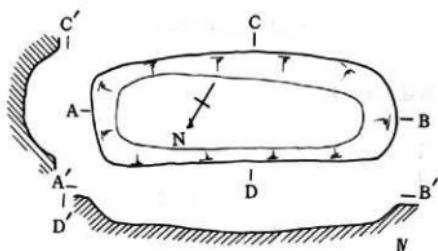
I号 長軸をN-64°-Eにとり長径 255cm
短径87cm、深さ19cmを測る。隅丸方形で断面
は浅い船底状を呈す。土括内に遺物は発見さ
れなかった。



II号 長軸をN-58°-Eにとり長径 101cm
短径76cmの隅丸長方形を成し、短軸の断面は
すり鉢状を呈す。土括内の北西壁に2個の小
角礫が検出している。



III号 長軸をN-32°-Eにとり長軸の北東
部は地層の変動あるいは擾乱により除去され
ている。相定復元すると長径約2m、短径77
cm、深さ17cmの船底状の断面となる。



IV号 長軸をN-30°-Wにとり長径 244cm
短径86cmで、I、II、III号と同様隅丸方形土
括である。深さ26cmの船底状の断面を成す。
土器、石器など遺物は確認出来なかった。

第33図 第VI地点 隅丸方形土括実測図

5 出土遺物

A 土 器

今回の第Ⅶ地点の調査において数種の土器が出土した。その中で主体を占めるのが縄文時代前期の塞ノ神式土器である。第Ⅲ層に遺物包含が求められ、出土状況は第Ⅲ層上部に遺構、遺物がとらえられることから第Ⅲ層上部に生活面が考えられる。出土土器の量は少なく完形品は無く、ほとんどが断片ないし小破片である。土器片の分布状況は第26図に示すがごとく台地中央、東、南側にかけて多くの分布をみることができた。花ノ木遺跡発掘対象区は7か所を数え出土土器については全体を早期の押型文土器から弥生期の成川式土器まで計11類に分類した。その中で第Ⅶ地点は11類中、7類が出土している。7類に分類した土器は縄文時代早期から前期にかけてのものである。これらの土器は第Ⅲ層から全て出土したものであるが、層位的な前後関係は確認することができなかった。

ア. 押型文系土器（第34図 - 1・2）

1は 6×5 mmの橢円押型文土器片である。橢円押型文は小さい文様単位で斜位に施している外側器面は褐色、内面は灰褐色を呈している。胎土に石英と雲母を含む。外面調整はよく、内面は雑な仕上りである。

2は巾1.7cmの回転山形押型文土器片で、内外面ともに調整はよい。胎土に石英と小礫を含み焼成はよい。色調は褐色を呈す。

イ. 石坂式系土器（第34図 - 3）

3は口縁部に近い土器片で、貝殻縁による羽状の文様を施している。外面は褐色、内面は灰褐色を呈している。胎土に少量の石英粒と雲母を含む。

ウ. 吉田式系土器（第34図 - 5・6・7・8・9）

5は口縁部が外反する円筒形の口縁部片である。口唇部は平坦に調整し刻目文を施し、口縁部に貝殻縁による横位に3条施文し、器面には貝殻縁による雑な押引き文様を施文する。色調は内外面ともに褐色を呈し、胎土に雲母と小粒の石英を多量に含んでいる。焼成はよい。

6は口縁部がわずかに外反する土器片である。口唇部を平坦に調整し刻目文を施す。口縁部に貝殻縁を横位に使用した3条の文様を施文し、器面に貝殻の隣、7本を原体とする押引き手法を用い文様とする。内面は窓でよく調整されている。色調は灰褐色を呈し、胎土に石英粒と雲母を含み、焼成はよい。

7は比較的厚い口縁部片である。口縁内面かは外反し、口唇部は丸味をおびる。内面は窓調整外器面は貝殻縁による押引き文様、胎土に雲母、石英粒含、色調は黒褐色、焼成はよい。

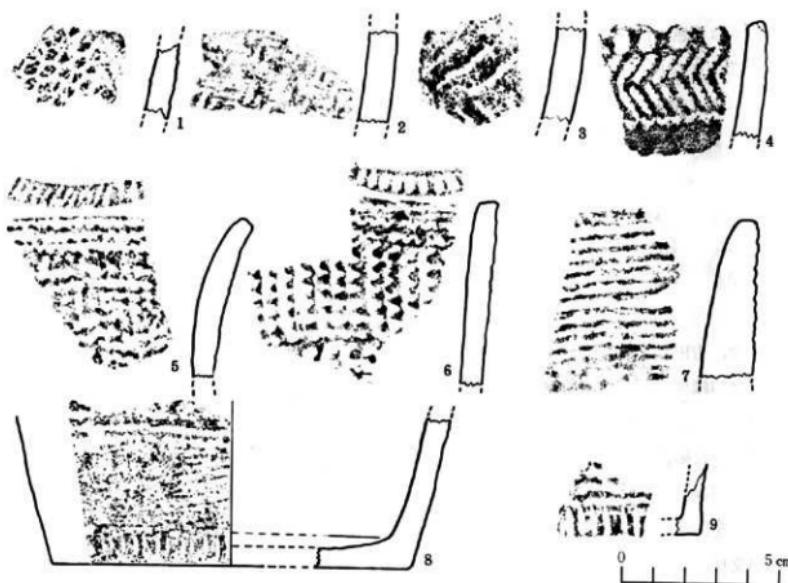
8は径11.3cmの底部である。底部から胴部にかけて直線的にのびる円筒形の土器と思われる。

器壁は薄い。胎土に雲母と多量の石英粒を含む。内面は範による調整、外面底部に縦位に刻目文、器面全面に貝殻縁による押引き文様あり。全体として雑な仕上りである。

9は8と同様の文様態を成す底部片である。底部は薄い。色調は灰褐色を呈し、胎土に雲母と石英粒を含む。焼成はよい。

エ. 前平式条土器 (第34図 - 4)

4は口縁部が比較的直線を成した土器小片である。内外面とも調整はよい。口唇部は平坦に調整し、口唇部外側に大い押捺文を施し、貝殻縁による羽状の押捺文、その下方に貝殻縁を横位に押捺する。胎土に石英を含む。焼成はよく、色調は暗褐色を呈す。口縁部にスス付着。



第34図 第VI地点 土器実測図(1)

オ. 塞ノ神A式土器 (第35図2の1-1・2・3, 第36図2の2-1・2・3)

1は頸部から口縁にかけての土器片である。口径38cmを計測する。器形は頸部で「く」の字形に屈曲し、その為、外側に陵線を生じ内側はなめらかな曲線を生じている。口縁部は波状をなし、先端でゆるく外反を成し頸部より下方へわざかに外反しながら胴部へ続くと思われる。文様は口唇部に斜めにはぼ等間隔の巾5mmの押捺文を施し、又、器面に蓖描きの復線幾何学文を構成する。頸部の陵線部には蓖状の施文具による等間隔の刻目文を施している。全体的に器壁は薄く粗製ではあるがよく整形されている。胎土は精選土が使用され少量の雲母と石英を含んでいる。色調は褐色を呈す。焼成はよい。

2は胴部から底部にかけての土器である。底部復元径は7.1cmを計る平底である。胴部はわずかに張りをもつ円筒形の土器である。文様は器面に巾1.6cmの範囲にわりあい大がらな撚糸文を継ぎに構成する。器壁、底部とも薄く、内外面の整形はよい。胎土は雲母と石英を含む。焼成はよい。色調は褐色を呈している。内面底部にスス付着。

3は胴部から頸部にかけての土器で、頸部で復元径20.5cmを計測する。頸部は「く」の字形に屈曲し、その為に内外とも陵線を生じ口縁に向ってラッパ状に開く。胴部はわずかに張りをもつ。文様は頸部上方器面に蓖描きの復線幾何学文を施し頸部に連点文、胴部に蓖描きの菱形を基形とした幾何学凹線で区画をつくり、区画内に撚糸文を構成する文様形態をもつものである。内外面とも器面調整はよく、胎土は精選土が使用され、雲母、石英を含む。色調は褐色を呈している。

(第37図 - 1・2・3・4・5・6)

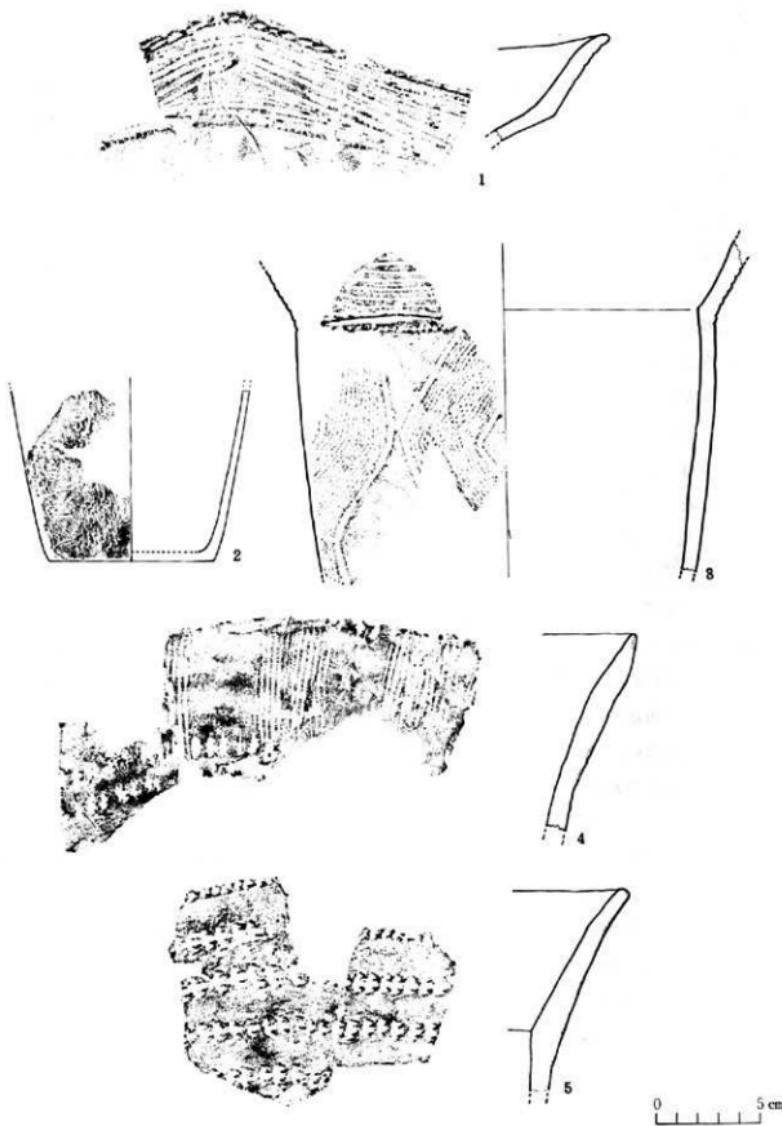
1は胴部から頸部にかけての粗製土器である。胴部は外側にわずかにふくらみをもち、頸部は「く」の字形に屈曲し口縁部へ外開きする。胴部は垂直に巾3.8cmにかけて撚糸文様を施している。頸部は三角状凸帯にヘラ状の施文具によるキザミ目文を施文している。胎土は雲母と石英を含む。焼成はよい。色調は褐色を呈す。

2は口縁部片である。外側頸部でふくらみをもち口縁部にかけて直線的に開く。口唇部は平坦な仕上りである。文様形態は器面の外側の口縁部のキザミ目文、二条の連点文を施し、それにはさまれた一条の沈線文、その下に連点文と2本の沈線にはさまれた口縁部の刻目文と同類の文様を構成している。内側の調整はよく仕上げている。焼きはきわめてよい。

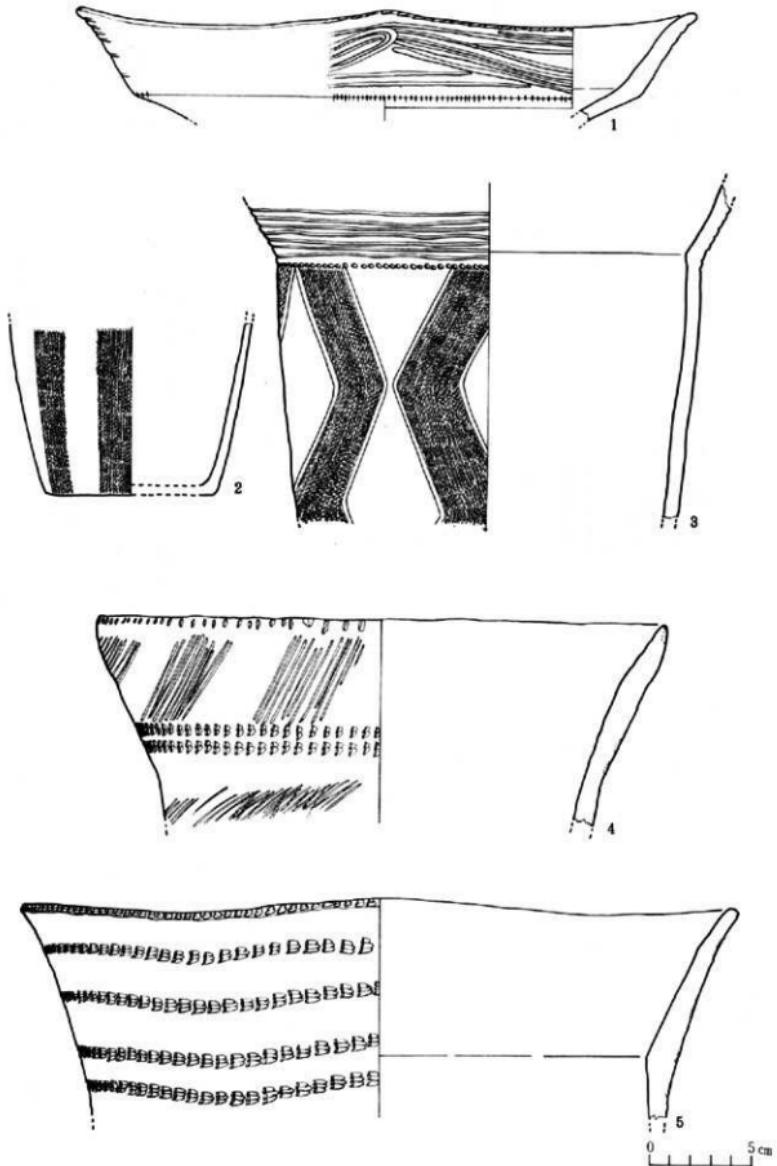
3・4・5は胴部の土器破片である。胎土に雲母、石英を含み、色調は褐色で、焼成は良好である。3・5はヘラ状の施文具で凹線を施し、凹線の区画内に撚糸文を構成する。

6は口縁部片である。口唇部は平坦に調整され外側に張り出している。又、張り出た口唇部に刻目文を施し、凹線の区画内に撚糸文を施文する。色調は灰色を呈す。胎土に雲母、石英を含み、焼成はよい。

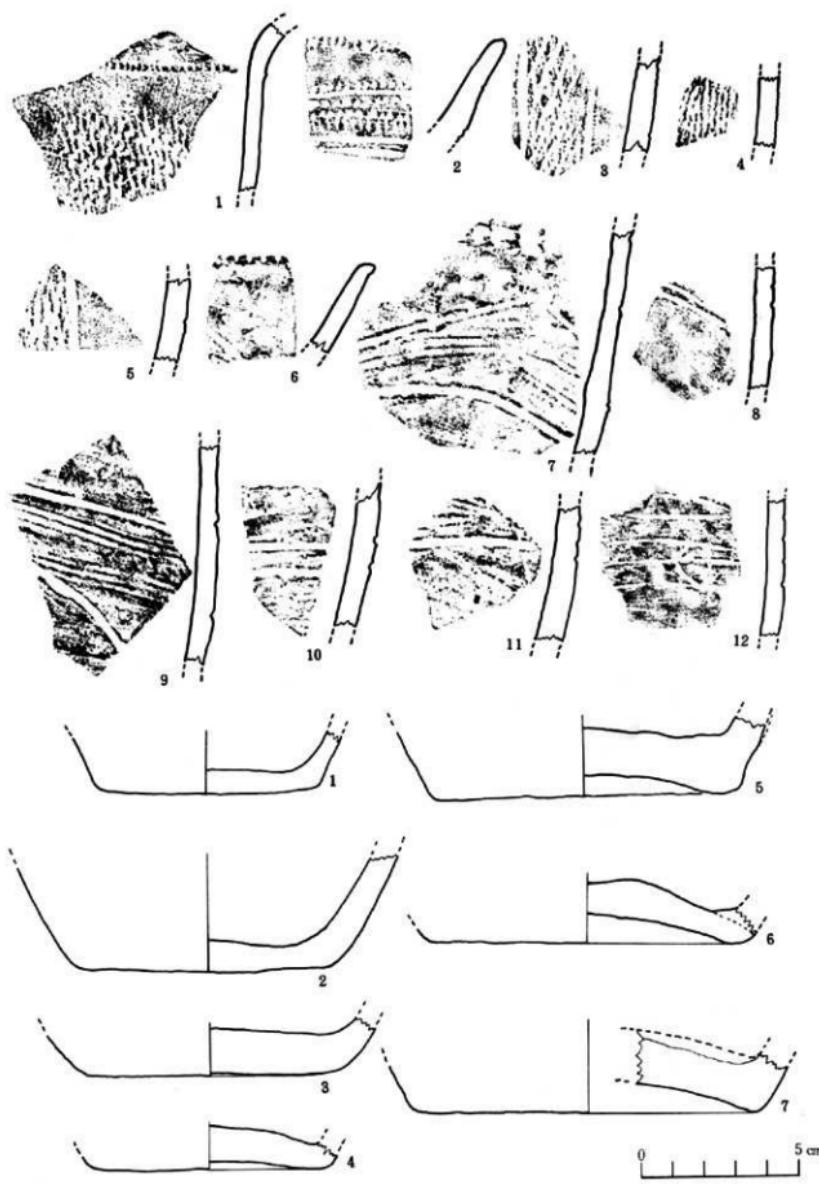
カ. 塞ノ神B式土器 (第35図2の1-4・5 第36図2の2-4・5)



第35図 第VI地点 土器実測図拓影（2の1）



第36図 第VI地点 土器実測図（2の2）



第37図 第VI地点 土器実測図拓影(3)

4は復元径27cmを計測する口縁部の土器である。頸部から口縁にかけてラッパ状にひらき口縁部外側は丸味をおび、口唇部で先細となる。頸部はゆるくしまり胴部へ続くと思われる。文様は口唇部に貝殻縁による押圧文を施し器面に縦に6本を基本とした2回のなで手法の施文をとり、又、その下に横位に平行する貝殻縁による押圧文と、頸部に斜行の範描き文を構成する。全体的に器壁は厚いが土器自体もろい。器面調整は雑である。胎土には雲母と石英粒を含む。色調は灰褐色を呈している。

5は頸から口縁にかけての復原径30.5cmの土器である。器形は頸部でしまり、口縁はラッパ状に開き外反している。その為、内側頸部に陵線を生じている。口縁部は波状を成す。口唇部は範による平坦な仕上りである。文様は口唇部外側に貝殻縁による押捺文を施し、器面に口縁部の波状に平行するかのごとく貝殻縁による4条の連続押捺文様を構成する。外側の器面調整はていねいであるが、内側は範による雑な調整である。器壁はわりあい厚くしっかりしている。焼成はよい。胎土には雲母、石英粒を含み色調は褐色を呈す。

(第37図 - 7・8・9・10・11・12)

7は頸部土器片である。内面調整は範による比較的雑な仕上りである。器面に貝殻縁による連続刺突文を施し、胴部には範描きの幾何学四線文の区画の中に貝殻条痕を施す。頸部に粘土のつぎ目の痕跡を見る。色調は内外面とも褐色を呈し、胎土には雲母と石英を含む。焼成はよい。

8は器壁が比較的薄い胴部土器片である。内外面とも調整はよく、2本の凹線文をもつ。胎土、焼成ともにきわめて良い。色調は明褐色を呈す。

9は胴部土器片で外側にわずかに張りをもつ。内面の調整は比較的雑な仕上りで、外面は範描きの幾何学四線文の区画に貝殻縁による条線を施文とし、7と同様な文様構成をもつ。胎土は雲母、石英を含む。焼成はよい。色調は褐色を呈す。

10・11は、それぞれ、わずかに胴張りをなす小破片である。内面は範による雑な整形、外側は2本の平行凹線文を施している。胎土に雲母、石英を含む。焼成はよい。色調は褐色を呈す。

12は胴部小片である。内側器面調整は雑な整形で、外側はていねいな仕上りを成す。比較的巾の狭い範による横位に凹線文を施している。色調は褐色を呈している。胎土に雲母、石英を含む。焼成はよい。

キ. 貝殻条痕文土器 (第38図 - 1・2・3)

1は復元口径23cm、復元底径15.8cmの円筒形の土器である。平底で立ち上りはわずかに丸味をおび、胴部は若干張りをもって口縁部へ直線的にのびる。口唇部は範で整形し平坦となる。器壁は1cmを計測し厚い。内面は範により研磨状に整形されている。器面全体に貝殻縁によるするどいタッチの斜交条痕文様を施す。胎土に多量の雲母と石英粒、それに滑石を含んでいる。色調は褐色を呈し、焼成はよい。

2は復元径18.7cmの口縁部である。口唇部は平坦に調整されている。胴部は若干の張りをもつ

円筒形の土器である。器面に1と同様な文様を成している。ただし、この文様の上から微刺突連点文を縦位に施文している。内面は箇整形、土器断面に土器製作技法の輪積みの粘土の接合面の痕跡を認めることが出来る。胎土に石英粒、雲母を含む。焼成はよく、色調は灰褐色を呈している。

3は復元口径26.5cmを計る口縁部土器片である。口唇部は丸味をおび、口縁部は若干外反を呈し、胴部はわずかに張りをもつ器壁の厚い円筒形を成す。口縁部に7状を基本とした貝殻縁による2列の波状押引き文を施し、胴部は素文である。内面調整は箇によるていねいな仕上りをとる。胎土に黒雲母、石英粒を含み密である。色調は灰褐色を呈し、焼成はよい。

ク、無文土器（第38図 - 4）

4は復原口径14.5cm、底部径 6.4cm、復原器高15cmを計測する。底部より口縁部方向へ直線的に開く無文土器である。口唇部は先細を呈す。内外面とも横なで調整。胎土に雲母と小礫粒を含み、色調は褐色を呈し、焼成はよい。

ケ、底 部（第37図3-1・2・3・4・5・6・7）

1は復元径 7.1cmの薄い平底である。底部末端部は内側で丸味を帯び、外側では直線的に開く形をとると思われる。色調は褐色を呈す。胎土に石英粒や砂粒を含む。焼成はよい。

2は径 8 cmの平底。底部末端部の立ち上りは内外面ともに丸味をおび胴部へと開く形をとる底内部はわずかに凸状を呈す。外部は平底となる。器面の調整はよい。胎土に黒雲母と砂粒を含む。色調は褐色を呈し、焼成はよい。

3は径 8 cmの平底。2と同形態であるが、底部に厚みをもつ。胎土に雲母を含み、色調は灰褐色を呈し、焼きは硬い。

4は径 7.6cm上げ底である。胎土に雲母を含む。色調は褐色を呈し、焼成はよい。

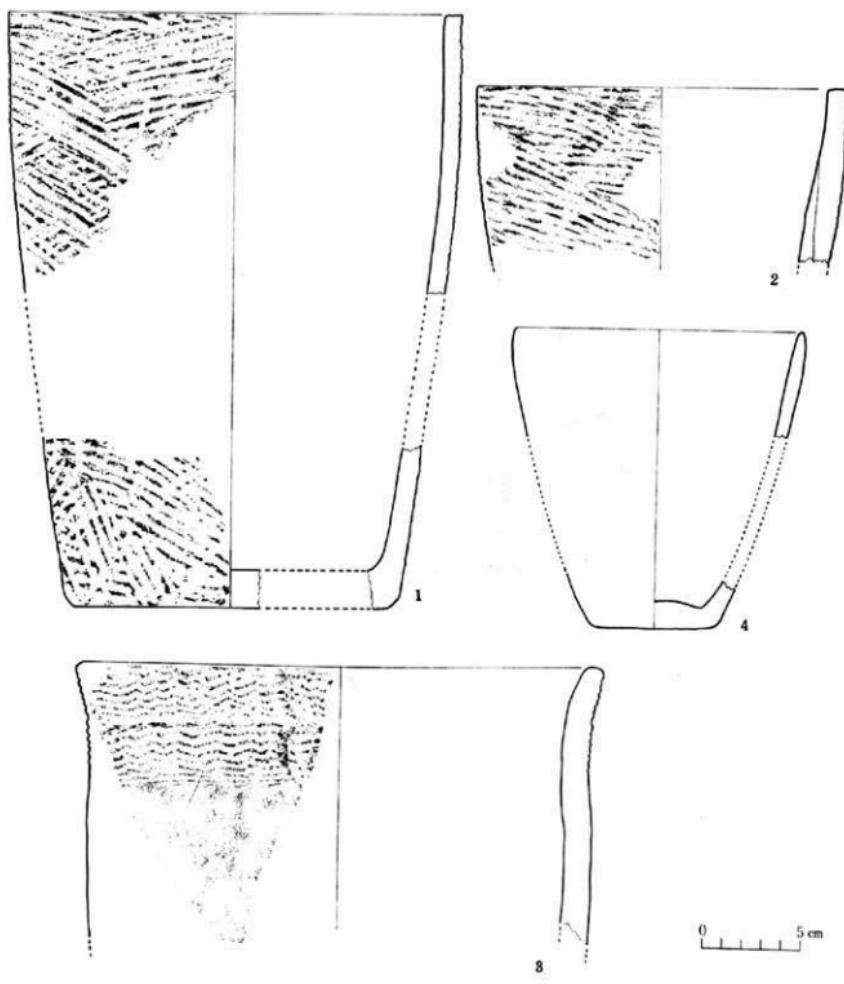
5は復原径 9.7cmの厚いあげ底である。内底面は箇整形、胎土に雲母と砂粒を含む。色調は灰褐色を呈し、焼成はやや軟弱でその為、器壁は剥落をうけている。

6は径10cmのあげ底である。底部と胴部に粘土の接合面を観察することができる。内外面とも調整は箇である。胎土に雲母を含む。色調は褐色を呈し、焼成はよい。

7は径 9.8cmのあげ底。6と同様に底部と胴部に粘土のはり付けの痕跡を観察する。内外面とも整形は箇である。底内面が剥落を受けた厚い底である。胎土に雲母や石英粒、大小の砂粒を含む。色調は褐色を呈し、焼成は良い。

B 石 器

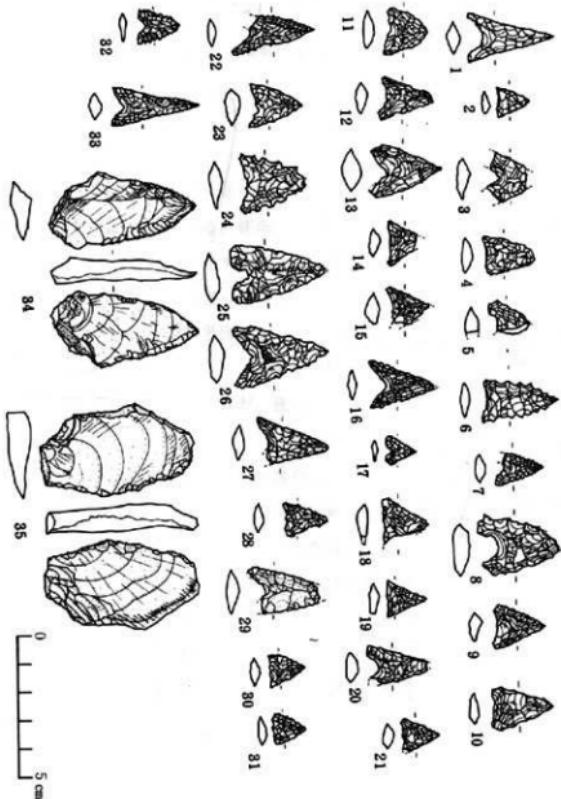
V地点において石器には表採も含めて総計35点出土した。うちわけは石鎌33点、削器2点、凹石3点、スリ石1点である。石鎌4点（第39図30～33）と削器は耕作土層より出土したものである。



第38図 第VI地点 土器実測図拓影(4)

ア 石 錐 (第39図-1~33)

総数35点出土しており、すべて無茎打製石錐である。石材のほとんどが黒曜石製であるがチャート、たん白石、安山岩などもある。形態的には大きく平基式と凹基式とにわかれ凹基式については正三角形に近いものと二等辺三角形に近いものとがある。また主要剥離面を残すものや鋸歯錐といわれる細かい調整痕のみられるものがあり、基部の抉り部分が円形あるいは、梯形をした鍬形錐も多い。石錐については図表に表わした。



第39図 第VI地点 石錐・削器実測図

No.	出土区	層	石質	長さ mm	巾 mm	厚さ mm	重さ g	タイプ及び備考
1	S-13	3	チャート	31	18	4.5	1.2	二等辺三角形に近い長身鎌。基部にふくらみ、凹式
2	R-14	3	黒曜石	12	10	3	0.25	剝片石器と思われる
3	R-14	3	黒曜石			4	0.86 (+ 2)	歯形鎌。脚部と先端は欠損
4	R-15	3	黒曜石	18	15	4	0.86	剝片石器。主要剥離面が残る
5	O-15	3	黒曜石	17		5	0.55 (+ 2)	歯形鎌。片方の脚部、体部を欠損している
6	N-16	3	黒曜石	26	15	3	1.1	鋸齒鎌。長身鎌。平基式
7	O-19	3	黒曜石	16	12	3	0.42	鋸齒鎌。脚部片方を欠損。凹式。細かく剥離を加えている
8	P-20	3	黒曜石	29	22	6	3.0	歯形鎌
9	P-25	3	黒曜石	18	16	5	0.8	平基式
10	T-27	3	黒曜石	21	15	4	0.9	剝片石器。主要剥離面が残る
11	S-27	3	黒曜石	14	16	4	0.7	平基式
12	P-27	3	黒曜石	19	15	4	0.55	剝片石器。主要剥離面が残る
13	P-27	3	黒曜石	25	18	6	2.0	凹式。脚の一部欠損している。基部にふくらみをもつ
14	L-26	3	黒曜石	10 (+ 2)	16	3	0.4 (+ 2)	平基式の鎌。先端部が欠損している
15	K-23	3	黒曜石	14 (+ 2)	13 (+ 2)	5	0.6 (+ 2)	凹式鎌で両脚部に鋸齒抉り込みがあり鋸齒鎌の部類か
16	H-13	3	火山岩	24	17	3	0.8	鋸齒鎌。凹式。細かく剥離を加え主要剥離面が若干残る
17	R-22	3	黒曜石	11	10	2	0.15	剝片石器。主要剥離面が残る。細石鎌
18	H-21	3	黒曜石	16	15 (+ 2)	4 (+ 2)	0.6 (+ 2)	長身鎌の部類か。凹式。基部にふくらみをもつ
19	S-11	3	黒曜石	14	13	3	0.45	剝片石器
20	I-25	3	黒曜石	24 (+ 2)	15	4	0.8 (+ 2)	歯形鎌と思われる。脚部の一方と先端を欠損している
21	K-24	3	黒曜石	13 (+ 2)	13	4	0.4	剝片石器。主要剥離面が残る
22	J-23	3	黒曜石	30	15	3	0.7	鋸齒鎌。長身鎌。バテナが進んでいる
23	H-21	3	黒曜石	19	15	5	0.8	凹式鎌。基部にふくらみをもつ
24	F-17	3	黒曜石	24	21	4	1.5	鋸齒鎌
25	Q-17	3	黒曜石	34	21	5	3.1	歯形鎌。抉り部分が狭い。先端部が若干欠損している
26	E-21	3	黒曜石	33	22	5	2.6	歯形鎌。抉り部分は三角形を呈す
27	H-14	3	黒曜石	26 (+ 2)	4	1.5	凹式鎌。脚一方を欠損している	
28	E-6	1	黒曜石	14	12	3	0.5	平基式の鎌。比較小さいく基部にふくらみをもつ
29	E-7	1	安山岩	25 (+ 2)	17 (+ 2)	4	1.5	歯形鎌と思われる。片方脚部と先端を欠く
30	表 採		黒曜石	12	11	3	0.25	
31	タ		黒曜石	12	11	3	0.25	平基式鎌。主要剥離面が若干残る
32	タ		黒曜石	15	12	2	0.2	鋸齒鎌。主要剥離面が若干残る
33	タ		たん白石	30	14	5	1.1	長身鎌。三角の抉りをもつ

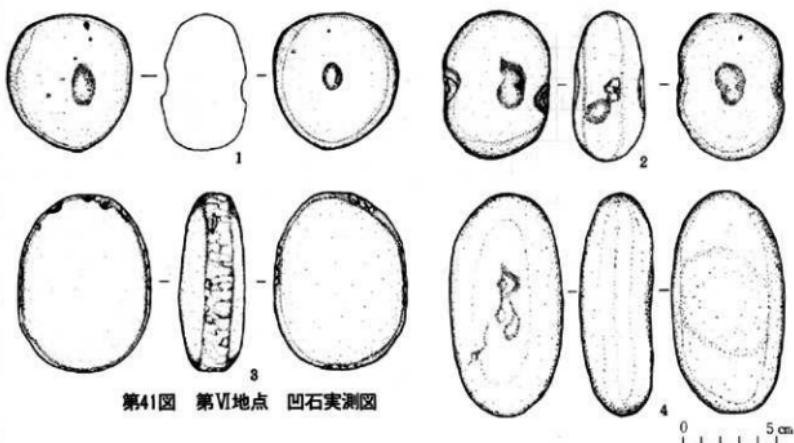
第40図 第VI地点 石鎌一覧表

イ 削 器 (第39図—34・35)

33・34は1層の耕作土中より出土したものである。33は縦剥ぎで取得された灰色流紋岩を素材とし縁辺を刃部としている。全体に磨滅が顕著にみられる。細かい二次加工は長辺に交互に施され、主要剥離面は弯曲を成し、背部にも二次加工をみる。34はチャートを石材に用い両面に二次加工が施こされている。

ウ 凹 石 (第41図—1・2・3・4)

1は長径7.2cm、短径6.7cm、厚さ4.5cmの安山岩の円盤で両面に敲打によって生じた凹みを生じる。2は長径7.9cm、短径5.5cm、厚さ3.9cmの安山岩。岩質は軟弱。両面に凹みを生じ側面にも使用痕をみる。1・2の凹石は集石IIに混在していた。3は長径9.5cm、短径7.1cm、厚さ3.5cmの安山岩で側面全体に使用痕あり。4は長径11.8cm、短径6cm、厚さ3.8cmの安山岩で片面に凹みをもつ。尚、集石VIに混在していた。



第41図 第VI地点 凹石実測図

まとめ

花ノ木遺跡第VI地点は、栗野岳から延びる洪積台地の一端にあり縄文時代前期の塞ノ神式土器を主体に出土する遺跡である。以下、成果を整理し述べることにする。

出土遺物や遺構は第III層（灰青色ローム層）の上部に出土をみる。これらの分布は台地の中央部、東、南側に認めることができた。集石群について、計10基を数える。これらの集石は3類に大別したが個々については先述したごとく、集石を構成する礫のほとんどが熱をおびていると考えられ、その為、剥落したものや打撃を加えるともろくもくずれるものもあった。このような集石遺構は、古くは旧石器時代の野川遺跡、押型文土器に伴う熊本県沈目遺跡、福岡県中原遺跡、大分県福荷山遺跡、縄文時代前期の鹿児島県頴娃町北手牧遺跡、宮崎県串間市大平遺跡も知られて

(4)

(5)

(6)

いる。野川遺跡の礫にはタール状の付着の痕跡が知られているが、Ⅶ地点の集石の礫の表面にはタール状の附着物の痕跡は認めることは出来なかった。それに礫周辺を細かく観察したが木炭、灰などの痕跡も確認出来なかった。蒸し焼き用の炉、あるいは祭祝に関係する構造とも考えられるが、今後の研究課題であろう。

台地南東部に発見された不整形土括は、土括内より、サクランボ属の果実の種子とイチイガシ（ブナ科）の堅果の植物遺体が検出したことにより貯蔵穴と思われる。時代は下るが、縄文晩期の遺跡で山口県熊毛郡平生町岩田遺跡、鹿児島県加世田市上加世田遺跡に貯蔵穴と多数の植物遺体の発見例をみる。⁽⁷⁾ 第Ⅶ地点の土括は形態の不備や植物遺体の極少など根拠に乏しい。又、土括内より検出した植物遺体は、はたして土括が破棄された時の残存なのか、土層が堆積する際に流入されたものかなど問題は残る。

土器については7類にも及ぶ土器が出土した。ア（第34図-1・2）は楕円形、山形押型文系の土器で出水下層式と思われる。その他、鹿児島県内における塞ノ神式土器と供する遺跡には平椿貝塚、石坂上遺跡など知られている。イ（第34図-3）は石坂上遺跡にみる石坂式土器片の⁽⁸⁾ 思われ頸部に羽状の貝殻縁による押捺文をみる。ウ（第34図-5・6・7・8・9）は貝殻縁による押引き文を特徴とする吉田式土器である。エ（第34図1-4）は口縁部小片で定かでないが口縁部の施文方法をみるかぎり前平式土器系統のものと思われる。オ、カは塞ノ神式土器である。第Ⅶ地点における出土土器の主体を占める。塞ノ神式土器については鹿児島県国分市平椿貝塚で⁽¹²⁾ 2分類されている。撫糸文条の土器をA式（A式a—撫糸文を主体とする文様、A式b—区画内に撫糸文を施す）、貝殻文条の土器をB式（B式c—棒内に貝殻条痕を施す、B式d—棒のないもの）とに分類されている。器形は円筒形（胴張りもある）の胴部に頸部は「く」の字形を成し口縁にいたってはラッパ状に開く。底部は平底ないし、わずかに上げ底を呈している。オ（第35図2の1-1・2）（第37図-1）は塞ノ神A式aである。（第35図-3）（第37図-3～8）は塞ノ神A式bである。（第35図-4・5）は塞ノ神B式、（第37図7・8・9・10・11・12）は塞ノ神B式cである。塞ノ神式土器で気づいた点は、A式に属する土器はB式より器壁が全体的に薄く、胴部にわずかに張りをもち、精製された土器である。なお、A式、B式の前後関係は把握できなかった。キの貝殻条痕文土器は塞ノ神式土器四供する土器であり、特質すべき土器であるといえよう。キ（第38図-1・2）は器面全体にするどいタッチの斜行条痕文を施す円筒形の土器で、キ（38図-3）は胴部に張りをもち、口縁部はわずかながら外反し2列の波状押引きを施す土器で、両者ともに貝殻縁を施文具とし、口唇部は丸味をおびていることなどからして石坂式土器系統の土器と想定されよう。⁽¹³⁾

石鎌については、前述したごとくほとんどが黒曜石を石材とし、たん白石、安山岩質のもみうけられる。回基式はもとより長身鎌、鋸歯鎌、鍔形鎌、細石鎌などバラエティーに富んだ石鎌が出土している。中でも細石鎌・鋸歯鎌・鍔形鎌の出土の比率が高いことに注目したい。

以上のように集石遺構、土括、貯蔵穴？など台地の中央部、東、南側に分布することと、土器

や石器などの分布状況とを考慮すると、その分布状況は重複している。住居址やそれに関連するピットなどは発見出来なかったが、これらのことから縄文時代前期の生活址が想定されよう。

文献

- (1) 小林達雄、小田静夫「第四紀研究」第10巻4号（1971年）
- (2) 熊本県教育委員会「沈目」熊本県文化財報告第13集 昭和48年
- (3) 福岡県教育委員会「中原遺跡」福岡県文化財調査報告 昭和48年度 概報
- (4) 大分県教育委員会「稻荷山遺跡」大分県文化財報告20・21合併号 昭和42年
- (5) 河野治雄「頬杖町郷土誌」昭和50年3月
- (6) 河口貞徳「考古学年報」10、昭和32年度
- (7) 田川日出夫（鹿大教養部生物学教室）氏、御教示による。
- (8) 潮見浩「1969年山口県岩田遺跡発掘調査概報」（広島 1969年）
- (9) 河口貞徳「上加世田遺跡発掘調査概報」（加世田 1971年）
- (10) 河口貞徳「鹿児島考古」第6号（昭和47年）
- (11) 木村幹夫「鹿児島県大口盆地の遺跡」考古学雑誌第22巻第10号 昭和7.10.5
- (12) (10) に同じ。
- (13) 河口貞徳（県文化財専門委員）氏、御教示による。

第VII 地点

I 調査の概要

E-WトレントNo.1で遺物包含層が、N-SトレントNo.2で2個の礫群が確認されていたので、包含されている層の直上までブルドーザーによる土の取り除きを三日間で実施した。この排土に際しては、工法についての打合わせをしたうえで指示しながら進めた。終了後一旦整地を実施し、両トレントを含めて4mのグリッドを基本に東西にA~G、南北に1~5の区画別を定めて調査をすすめることとした。

調査はブルドーザーによる排土を黄褐色火山灰層の上部まで実施したので、この下部から掘り下げをすすめることになったが、B-1の黄褐色火山灰層の中程で石斧1個が認められた。

ついで、黄褐色ローム層の掘り下げをすすめたが、A-3、C-5の2箇所で黄褐色ロームの上部から黄褐色火山灰層が這入りこんだ土壌と認められるものを検出した。

更に、N-SトレントNo.1の断面図に認められた掘り方はC-5に位置し、これに類似した掘り方がC-5に1個、C-5・6に1個が認められ、特に、B-5、C-5の2個については同一個体又は同一型式とみられる土器が存在することが調査をはじめてすぐ判明した。

灰青色ローム層のE-3、F-G-2、C-D-6、F-5の4箇所では集石が検出された。また、この灰青色ローム層の直上から同層位の上部にかけて、B-C-5・6では他のグリッドに比べて、縄文式土器や石錐の発見がなされたのに対し、集石を含む周囲及びA-B-C-1・2、D-G-1・2・6にあっては遺物は認められていない。これが如何なる関係に依るものか明らかにする手がかりはなかった。灰青色ローム層では上記以外の遺構・遺物のほかは確認されていない。

次いで黒褐色ローム層の掘り下げを実施したところ、D-3で集石遺構が（N-SトレントNo.2で確認されていた）また、A-5では同一個体と見られる縄文土器が認められたので、他のグリッドについても調査をすすめたが、A-5以外のグリッドでは先述した以外の他は認めることはできなかった。

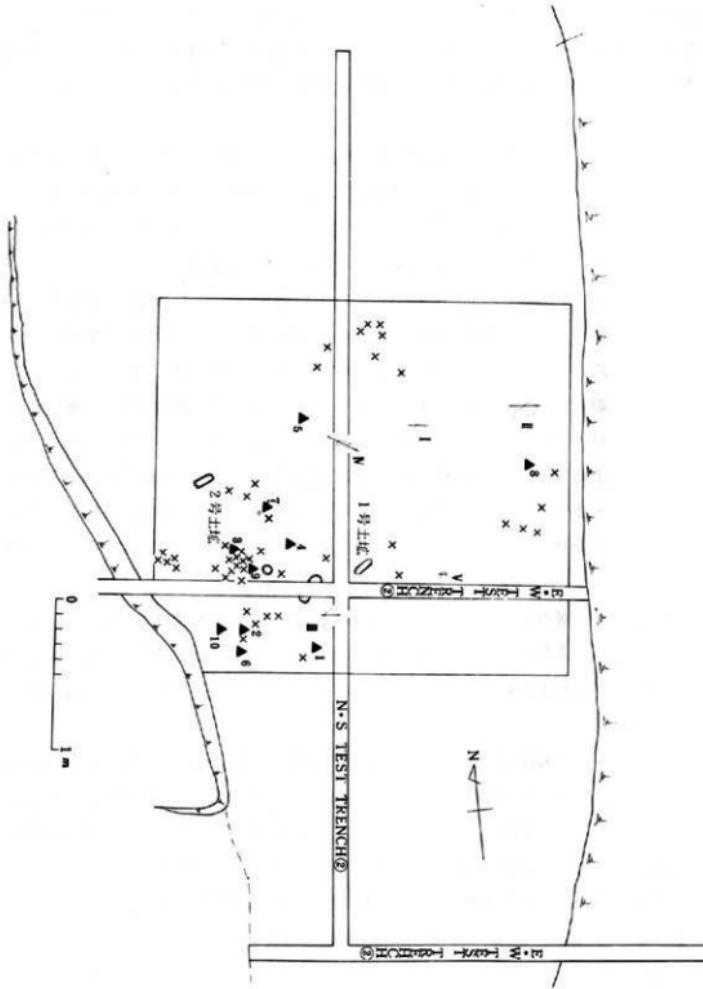
なお、A-C-5の黒褐色ローム層にあって、黄褐色火山灰層が填まっている径7~20cmの柱穴状のものが10数個存在した。形状からして、明らかに樹根と想定していたが、全部調査すべきであるとの指摘を受けたので改めて各柱穴状のものについても調査した。その結果は、何れも斜行したり分岐または先細りになって柱穴と考えられるものは1個も認められなかった。

調査は、黒褐色火山灰層の下部黒褐色ローム様火山灰層及び細砂を含む黑色ローム層（一部粘土混りの礫層まで）実施したが、この部分には遺構等は存在しなかった。

2 層位

N-SトレントNo.2とE-WトレントNo.1に示したとおり、北端で4層が消失していること、

東端に近いところではシラス層と一部に小礫を含む粘土層が残存して土層は流失を推定できること、一部において黒色火山灰層及び黄褐色ローム層が欠如していることは既に述べたとおりである。しかし、先述したこと以外に今少しく層位について補記すると、A～D-5・6で黒色火山灰層が、E～G-1～6で黒色火山灰及び黄褐色火山灰層は見られなかったが、これ以外のグリッドにあっては、確実な土層を観察することが可能であった。



第42図 第VII地点 調査区実測図

この地点の最も標準的な層位は、

I 层	I a ……暗黒褐色火山灰層（耕土）
	I b ……黒色火山灰層
II 層	II a ……黄褐色火山灰層
	II b ……黄褐色ローム層（バミスを含む）
III 層	灰青色ローム層
	IV a ……黒褐色ローム層
IV 層	IV b ……黄褐色ローム様火山灰層（チョコレート色）
	IV c ……細砂を含む黒色ローム層

となっており、黄褐色ロームは粘性に乏しいこと、その下部のアズキ大のバミスは粒状であることから他の層に比べて起伏や流失がみられる。また、細砂を含む黒色ローム層は一部欠が見られ面としては確認できなかったところもある。

最後に円形又は橢円・長楕円形で短径100~150cm、長径150~200cmの一見遺構を想定させるような部分が2・3見られたが、一般的な不整合によるものか、また火山灰地帯特有のものかは定かでないが、断ち切って断面を調査したところ、下部から押しあげられたものでなく、横圧が加わったために3又は4つの層が上に押しあがったものと推定した。このような土層の盛りあがっているのは、黄褐色火山灰層まで黒色火山灰層は影響を受けたところがみられなかつたことから黒色火山灰層の堆積以前に属するものではないだろうかと考えられる。

3 遺 構

A 土 坡

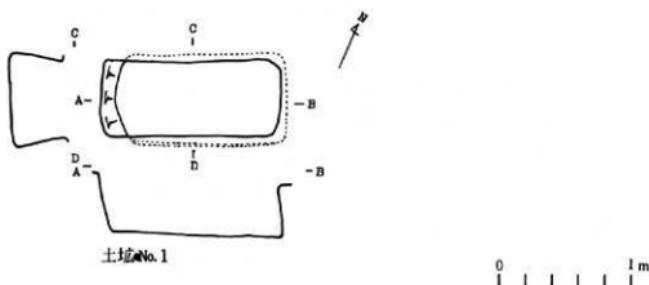
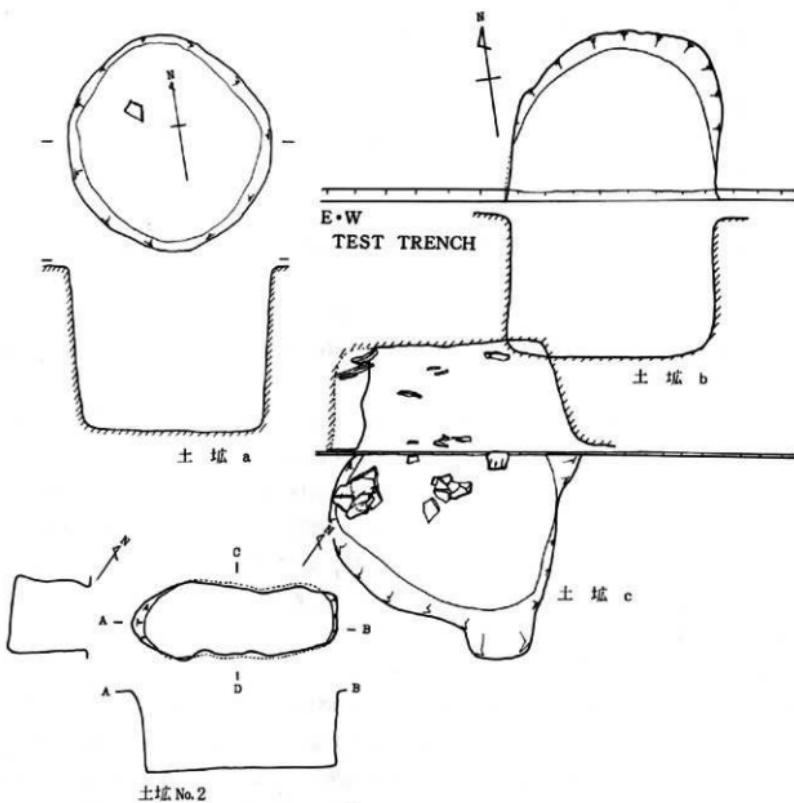
土坡については、発見された順で1号及び2号の番号を付した。

1号土坡 D-5のもので黄褐色ローム層の直上で発見され、土坡内には黄褐色火山灰層がみられた。上縁の最長は約156cm、最大巾は約58cmを計測し、形状は片方は隅丸方形に近く他方は九形を示している。深さは上縁端部から約-60cmである。長辺の断面(A-B)は若干の内法が見られるが、C-Dの断面は底近くで幾分外側に張り出した所謂袋状近い形を示している。内部には殊更格別の施しは認められず、底に近い所に微細な炭化物が然も極少量認められたに過ぎなかつた。

2号土坡 A-3区において確認されたもので、1号土坡と同様黄褐色ローム層の直上で発見され、中には黄褐色火山灰層が填つて掘り方の輪郭はしっかりしていた。上縁の長軸は約134cm、短軸は約59cmで、一端は方形他は隅丸方形をなしている。土坡の深さは約40~46cmである。A-Bの断面は平行四辺形状で一方が内法をもつて他方に對して他方に張つてゐる。また、C-D軸は対称的に内傾して台形状を示している。

土坡内は黄褐色火山灰が充されていた他に、北壁と底とに木炭片が若干認められた。

然して、両土坑が縄文時代のどの時期に位置づけられるのか、その手がかりはなるものは全然



第43図 第VII地点 土塚実測図

認めることはできなかつたが、まず共通する点を整理すると次のようになるようである。

- ① 堀り方は、黄褐色ローム層の直上で判明したが、内部に填つてゐた土は黄褐色火山灰層と同質の土で、僅かに黄褐色ロームが認められた。
- ② 堀り方は内部に填つてゐた土からして、黄褐色ロームの時期より新しく黄褐色火山灰層の時期に位置づけされるものと考えられる。
- ③ 何れも木質の炭化物が少量認められたが、それ以外のものは確認されていない。
- ④ 土壇内には炭化物を除いて、礫とか砂などを含めて何等の遺物も認められなかつた。

等であるが、②と結びつくものとしてはB-1で石斧1個が認められた以外に何も存在しないので時期的には石斧と略同期としても支障はないと思われるが、具体的な編上の位置づけについては避けたい。次に土壇の性格であるが形状からして1号は約156cm、2号は約134cmで2号が短いけれども巾は両者近似している。内部に木質の炭化物以外はなかったが、土壇の形状等から大人・小幼兒・性別及び葬法は一応除外するとしても、埋葬のための土壇と考えたい。

次にB-5、C-5、C-5・6に認められた土壇について、ここでは便宜的に前者と区分して、A-5をa号、C-5をb号、C-5・6をc号として述べることにする。（挿図第43図）
a 土壇 径72~75の円形に近い掘り方で、深さは約60cmを計る。土壇内には黄褐色ローム層及び灰青色ローム層が混在し、縄文土器片若干の他は確認されていない。なお、最下部にも1片だけ貼りついていた。

b 土壇 E-WトレーンチNo.1で断ち切られたために全容は明かでないが、短径約77cm、長径は塙底のカーブから約80cm内外になるものと推定される。この場合も内部に縄文土器片が認められたがそれ以外に検出されたものは存在しない。塙底は平坦で約63cmの深さをもつてゐる。

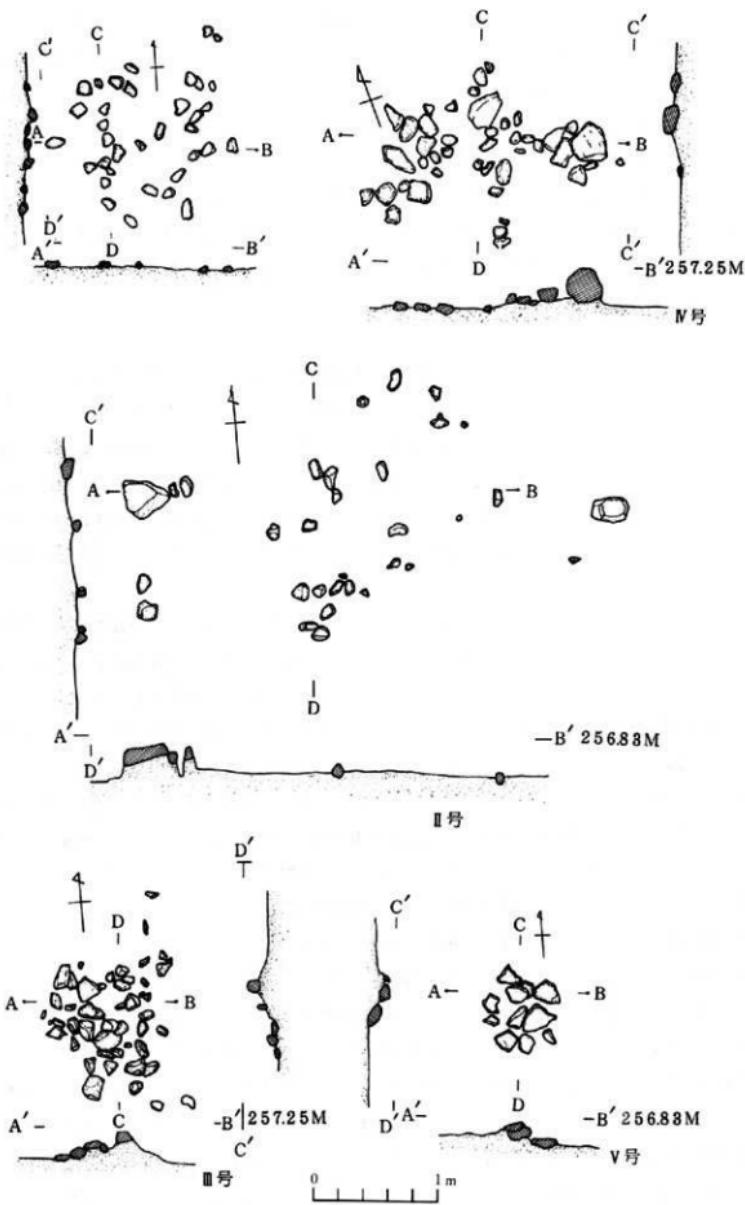
c 土壇 径約90cm前後の略円形の土壇になるものと推定され、土壇の上位から中・下位まで縄文土器が認められた。深さは約38~40cmで底面は若干傾斜があるが殆んど平坦に近いと云つても過言ではあるまい。特にbとcはトレーンチで断ち切ってしまったために、同一土壇の両端のみが残ったのではないかと当初見当をつけたが、堀り方のカーブが不一致であること、底面のレベルが異なること、そして塙底のカーブも一致しないことから別個の土壇と判断した。

以上、a~cの土壇の概要を述べたが、この3個の土壇は、

- ① 黄褐色ロームの中程より上から堀り方が始つてゐること。
- ② それぞれ、大きさや深さは異なるが、形態上は三つとも大差はみられないこと。
- ③ 三つとも縄文土器の破片を除いては、内部から遺物は認められていないこと。
- ④ それぞれから出土した土器は同一個体をなすこと（挿図第46図-1）

の共通点をもつてゐるが、その性質を明らかにするに足る資料を得ることはできなかつた。形状からすると貯藏穴との見方も不可能ではないかも知れないが、ただ、三つの土壇から出土した土器が同一個体をなすことは、時間的差が殆どないとして考えてよいのではないか。

B 集 石（挿図第44図）



第44図 第VII地点 集石実測図

E-3を1号、F・G-2を2号、C・D-6を3号、D-3を4号、E-5を5号として概略の説明を加えることとする。

1号 平坦な面に稍々ばらばらに置いた形で、どの部分又は何れの石が中心になるのか判然としない状況である。群を形成する礫も大きさは10cm以下である。断面から見ると掘り方もなく、攪き散したような感じのする集石である。

2号 1号に比較して更にまとまりはなく、まさしく散々とした広がりを示している。ただ東西に対称的に存する比較的大きい石が目立っている。掘り方は存しない。

3号 黒褐色ローム層の中程で確認されたもので、5つの集石の中では最もまとまりがある。10cm内外の礫を含めて、約50個の石が用いられている。断面から見ると稍々盛り上ったような場所に配した如く見られるが掘り方は認められない。

4号 3号についてまとまった群をなし、最も大きい石で径15cm程のものが用いられてはいるが、他はこれよりも小さいものである。この集石の場合も掘り方等はみられない。

5号 5群中最も規模の小さいもので、僅か11個の礫で構成されている。少し盛りあがったようなところに配したような感じがする。

以上述べた如く事実を説明するに窮るような集石であるが、共通する点についてまとめてみると、

- ① 3号を除いて何れの集石も灰青色ローム層の上部に位置する。
- ② 火熱を受けているとみられる。
- ③ 使用している礫は大きいものでも径約15cm程で、これ以下のものが使用されている。
- ④ 断面は平坦又は若干盛り上ったような形状を示しているが掘り方はみられない。

等であり、集石の分布状況をもとにして、強いて分けると、

- ① まとまりをもつたもの（3・4・5号）
- ② ばらばらのもの（1・2号）

になるようである。其の他、集石を構成する礫の個数等も検討すべきであるが、第5・6地点においても集石が確認されているので別の所で触ることにする。

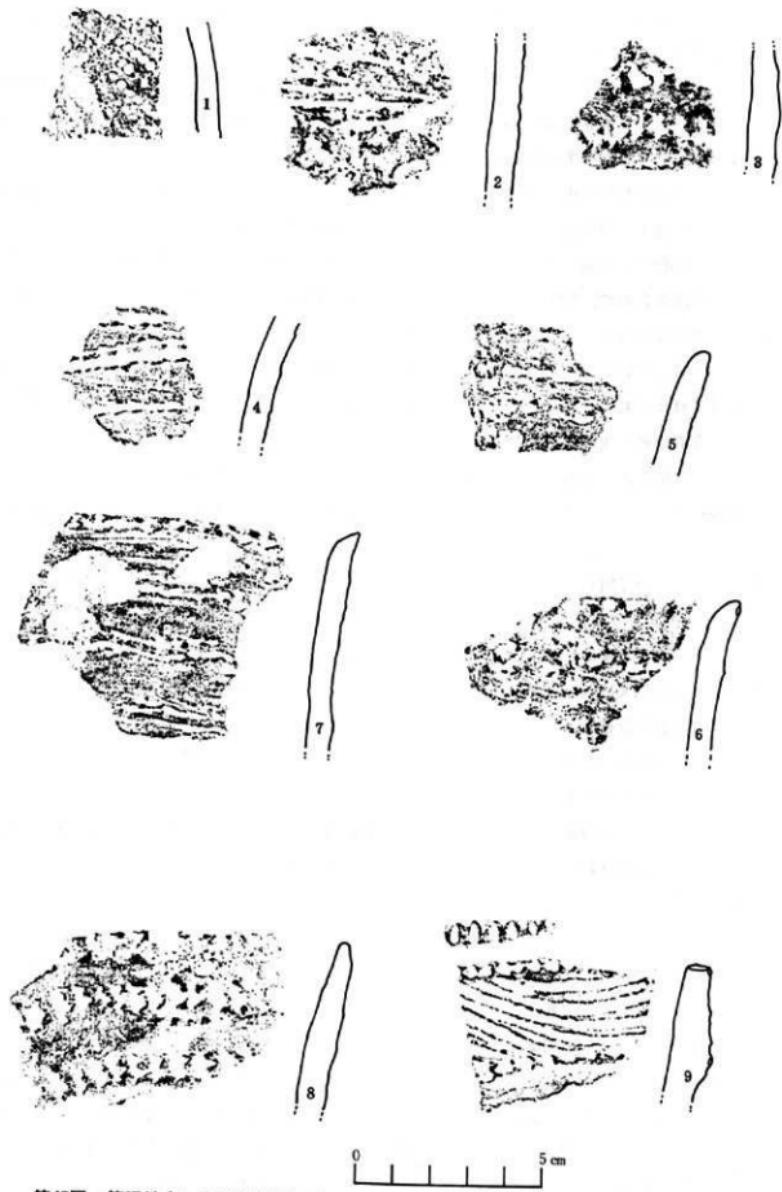
4 遺 物

A 土 器

調査によって採取した土器の量は極めて少量であるが4型式に分けることが出来ると考えられるので、順に説明することとしたい。

ア 塞ノ神式土器（挿図第45図）

灰青色ローム層の上部に認められたものは3個で、いづれも小片のみで器形の明らかなものはみられなかった。1は胸部と推定され器面に撚糸の施文が見られることからA類に属するのである。2も胸部又はそれに近いところと見られる小片であるが、表面に沈線がみられることからしてB類の範疇に属するものであろう。3は貝殻文を有しB類に属するものであろう。



第45図 第VII地点 土器実測図 (1)

次いで、黒褐色ローム層の上位で確認されたものは、4・5・6・7の4個で、4は器体の何れの部分か判然としないが、若干外反していることからすると口縁部に近いとも考えられる。5・6・7は口縁部である。5は口唇部に一条の押し引きによる施文があり、その下に三条の押し引き施文と口唇部から縦に2本の押し引き施文が認められる。口縁内側は竪状のものでヨコナデしたようでしっかりした調整がなされている。6も口唇に一条の押し引き施文が認められ、その下に2本のこれも押し引き施文をなし、縦には2本単位の浅い押し引きが2箇所施されている。口唇は竪状のもので調整し、口縁内側も同様の調整がなされ僅かに稜をもっている。口縁全体はかすかに外反する。7は口唇に2条の浅い押し引き施文をなし、これより下は2本単位の押し引き施文が、ほぼ等間隔で3箇所見られる。口唇はこれも竪状のもので殆んど平坦にカットした如く仕上げられている。内側もやはり竪状のもので右上から左下方へ削り取るようにして調整してある。全体的に外反している。

これらの4~7の土器に共通する点は、

- ① 口縁部がどの場合も僅かに外反している。
- ② 口唇部に1本または2本の押し引き施文が認められ、その下にも2本単位の押し引き施文が見られる。
- ③ 縦にも2本単位の浅い押し引き施文が認められる。
- ④ 口唇は蒲鉾形又は平坦で、蒲鉾形のものでも内部を竪調整し、平坦なものは口唇から内部にかけて竪状のもので調整している。

等であるが、層位的には塞ノ神式を包含する灰青色ローム層よりも下層の黒褐色ローム層の中程で確認され、集石3号と同時期と考えられるが、器形、施文が判明しないのでC類とした。

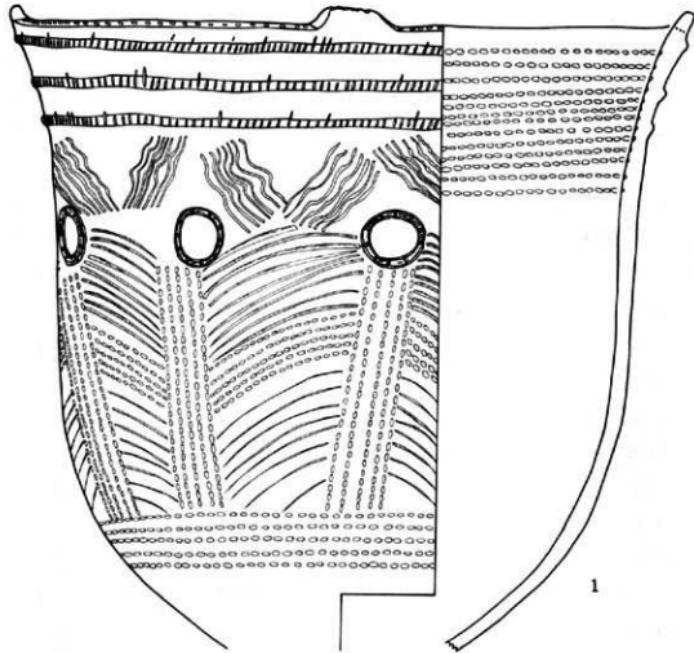
なお、8は貝殻文系で本来ならB類とすべきであるが、これも、上記の4個と同じ黒褐色ローム層において検出されたものであって別に記した。この土器の表面は貝殻腹縁による施文があり、内側は特別の調整はみられない。器形は直線的か又は僅かに内弯するような形状である。推定の口径は9cm前後になるものとみられる。

イ 平柄式土器（挿図第45図）

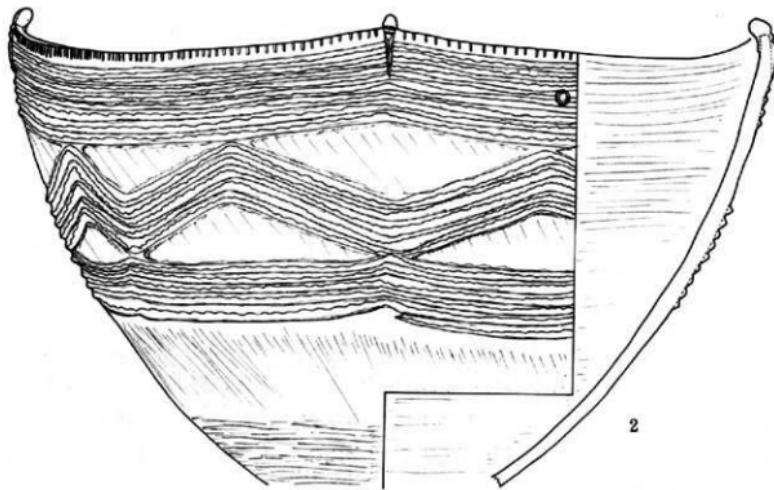
塞ノ神式と同じ灰青色ローム層から検出されたもので、口唇部に浅い刻みがあり、口縁は上下の押圧列点状の間に数条の沈線が施されている。

ウ 深浦系土器（挿図第46図1）

a・b・cの3個の土坑中から検出されたものを接合したところ、底部及びそれに近いところだけが欠失している。口径約37cm余、器高約36cm内外、器形は頸部から口縁部にかけて外反し、口辺部に3本の貼付け突帯がみられる。胴部は張りが殆んどなく直線的に下がるが、胴の下部では稍々膨みをもって底部に至る。底部は不明である。口縁部には4個の山形がみられ、また縫粒状の凹を一列に配してある。口縁部の貼付け突帯は三つとも竪状の刻みが施され、また數本毎の深い刻みは器体に及んでいるものもみられる。



1



2

第46図 第VII地点 土器実測図 (2)



頸部には7条の斜行の曲折した沈線が対称的に配置されている。この斜行沈線の下の空いた部分に円形の貼付突帯を配して、これにも刻み目を施してある。この各円形貼付突帯から下部に5列の殻粒状凹列が胴下部まで延びている。そして、一つ毎の円形貼付突帯から左右の下方に9又は10本の沈線を施し、ついで同様の方向に5列の殻粒状の凹列、更に、7本の沈線を施し、胴下部の5列の殻粒状凹列で全体的な締めくくりがなされている。

なお、頸部から口縁の内側には表面と同じような殻粒状凹列が13程みられる。

この土器を検出した土坑が黄褐色ローム層の中程から始まることは前に触れたところであるが、時期的には塞ノ神よりも新しいことは確かであるがどこに位置づけられるべきなのか。春日式に先行すると考えられなくもないが今後の研究にまちたい。

A 蟲系土器（挿図第46の2） A-5の黒色ローム層の中程において確認されたものである。口径約41cm、器高約28cm内外とみられる。器形は内弯する深鉢形を呈しているが、底部は欠損して定かでない。口縁部は弱い山形をなし、4個の尾部がついたような鉗状の貼付け突帯をもっている。口唇部には竪状の細い刻み目が施されている。口縁部には貼付細隆起帯文の上を指頭で擦~~擦~~まんだようなミミズ腫状をなしているが、胴部のものは、竪状調整のあとに鉗状貼付けの下に波状の低い下に波状の高いところがくるようにして、5条からなる波状の細隆起帯文を配している。この波状細隆起帯文の低い部分に接するようにして、胴下部に5又は6条の稍々上下のバラツキのある細隆起帯文が配置されている。この下は、斜行の密な竪調整痕が、底部に近いところは稍々粗雑なヨコナデの調整のあとがみられる。内部も全体的に竪状の調整がなされている。尚、口縁部には一般に補修孔と云われている穿孔の残部が認められる。

この虫系土器は、塞ノ神式土器の包含層より一つ下層において認められたことは繰り返し述べたところであるが、蟲系土器の中ではB類に属するものと考えられる。

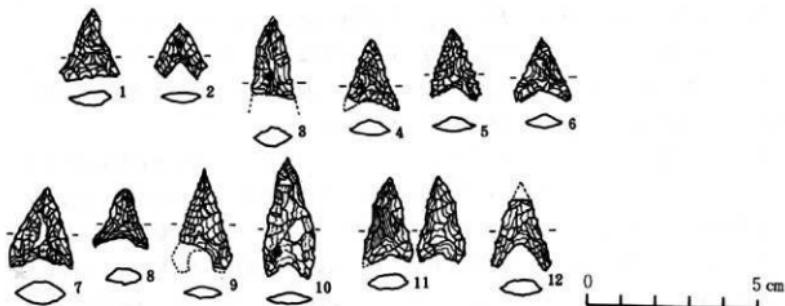
B 石 器

ア 石 錐（第47図）

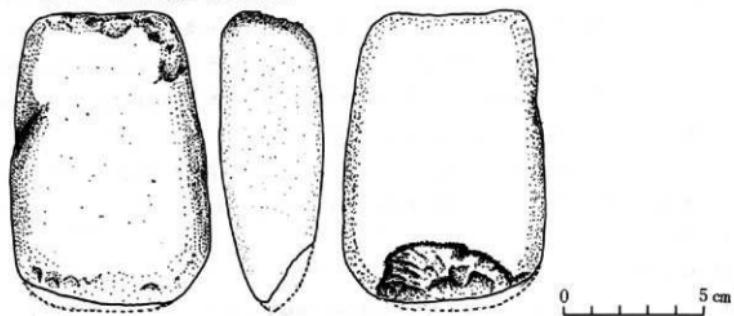
1は底辺に抉り込みをもたない錐。長さ21cm、巾17cm、黒曜石。2は三角形の抉り込みをもつ、二等辺三角形錐。石英質か。3は先端部と胴部半分を欠損。長身錐の部類か。黒曜石。4は片脚部欠損の底辺に抉り込みのある錐。基部にふくらみをもつ。黒曜石。5は押圧剝離の細かな鋸歯錐。抉り込みをもつ。黒曜石。6は底辺に抉り込みをもつ正三角形錐。二次加工痕あり。黒曜石。7は大形錐。基部は厚い。長さ23cm、巾18cmで底辺にわずかに抉り込みをもつ。8は脚部を外側に強く誇張させ肩を造り出したもの。底辺に抉り込みをもち、先端部は丸味をおびている。9は両脚欠損。片脚は一部欠損、底辺に抉り込みをもち押圧剝離を入念に施す。10は肉が比較的薄く、特に先端部が将棋の駒形を成す。底辺に抉り込みをもつ。石英質。長身錐の部類に属する。11・12は表採。11は片方脚一部を欠損。10と同様な将棋の駒形を成す先端部。底辺に抉り込みをもつ。一部背面を研磨している。中心に稜線を生じる。頁岩。12は先端部を欠損。底辺抉り込みが深い。石英質と思われる。

イ 石斧（挿図第 図）

B—Iの黄褐色火山灰層の稍々下部で検出したもので、硬質砂岩とみられるものである。最大巾は約7cm、最長は約10.4cm、最も厚い部分で3.7cmあり、刃部は蛤刃状であるとみられるが、片方は刃部の中央部近くが欠損している。剥離の状況は刃部への打圧が加わった際に生じたものと考えられる。また、両側面は敲打による調整のあとがみられる。



第47図 第VII地点 石鎚実測図



第48図 第VII地点 石斧実測図

5 まとめ

この地点の調査は当初弥生時代後期成川式の遺跡として試掘調査を行ったものであるが、予定したものについては耕土から若干を採取したのみである。しかし、トレンチ調査によって縄文時代の遺構・遺物が確認されたので全面調査を実施した。その結果は、黄褐色火山灰の填った土坑2基とその下層の灰青色ローム層から始まる三個の掘り方が認められた。三個の掘り方にはそれぞれ土器が内部に存し、しかも、三個の掘り方から発見された土器は同一個体をなすことが判明したけれども、掘り方の用途を積極的に証する資料は得ることができなかった。

次いで、この下の灰青色ロームの上部では塞ノ神・平桟式の土器片が認められた。両者は層位的には全く同一の位置に存したものである。この二つの土器と同じ層の遺構として4つの集石の

存在が確認された。集石は何れも火熱を受けてはいるものの、分布の状況が各々異なること、掘り方を伴わないこと、他に関連づけられるものがないこと等からその性格を解くことは難点があるようである。ただ、4個の集石が塞ノ神・平底式土器と同時期に属することは認めてよいと考えられる。また、3号集石と塞ノ神系でC類とした土器は塞ノ神・平底式の時期に先行して轟式のB類と同一時期に属する可能性も考えられよう。

従って、この地点にあっては四つの文化層が存したことになる。

第4章 各トレーニングの調査

これまでの調査地点は分布調査で確認されたところ及び原地形が残存しているところであったが、分布調査で遺物等を認めなかったところについても、確認調査を実施すべきであるとの指摘を受けていたので、耕土の色合いや土手の法面の土層を考慮して、東西5本、南北7本のトレーニングを設定した。ただ、第7地点については凹地に1m余の土量を盛ってあるとみられたので、ブルドーザーによる排土の目安を得るための含みをもって設定したものである。

以下各トレーニングを設定した地点及びトレーニングの概要について記すことにしたい。

1. N-Sトレーニング No1 (37m × 1・ 挿図第4図) 第II・IV地点の間に設定したもので、

- ① 弥生時代後期とされる細片を採集したので造構の存否及び遺物の確認をする。
- ② この凹地の延びがあるのではないかと予想したこと。
- ③ 第II地点のA-Yの1は黄褐色火山灰層乃至、黒褐色ローム(IVa)まで削平され、第IV地点は粘土層が耕土になっているが中間の土層の概略を把握する。

ことにあった。しかしながら耕土から弥生時代後期とみられる若干の破片が採取されたのみである。層位については、このトレーニングのうち、E-WトレーニングNo.1とクロスする北側では、農道との間にある畦畔から畠地は約1m程低いところに位置して、明らかに削平されたことを示していた。末端の土層はそれを如実に示しており、耕土の下には黄褐色ローム様火山灰層だけが残存していた。しかし、中程から南側は黄褐色火山灰層の約半分とそれ以下の層が残存している。更に、このような層位関係は、E-Wトレーニングと第II地点との間でも連続的なものとして捉えることができた。また、第2の凹地については、E-Wトレーニングの部分が最も深いことが判明した。第II地点との関係では、南側で幾分高くなっているものの、第II地点との間は地表で1m近い差がみられ、第II地点が削平されたことが一層明瞭となった。

2. N-Sトレーニング No2 (52m × 1・ 第4図)

トレーニング設定前の分布調査では、弥生時代後期と考えられる土器の小片が採取されていた上、E-WトレーニングNo.1で縄文土器の包含層が存する手がかりを得たので、

- ① 遺跡の範囲をできるだけ確実に把握すること。
- ② 以前は、更に凹地で整地によって現況に至っていると云われるが、盛土した量によって、調査方法を検討すること。

の含みをもって実施した。

層序から見た地形は北側と南側が高く、中央部が凹地を形成した原地形を如実に示している。南側は2層がカットされ、北端は4層が削平されているが、中央部はプライマリーな層が残存している。即ち、表層一黒色火山灰層一黄褐色火山灰層一黄褐色ローム層一灰青色ローム層一黒褐色ローム層の土層がみられるが、黄褐色ローム層は比較的粘性が少ないと見られ、層の堆積に起伏が生じていた。

このトレンチ内において、E-WトレンチNo.1の北壁から8m地点の黒褐色ローム層と南壁に接した灰青色ローム層の2箇所において集石と推定される礫群が発見されたのでこのレベルで掘り下げを中止し、ブルトーザーで排土するためにビニールで被覆後埋め土した。この箇所は後日第7地点として調査することにした。

3. N-Sトレンチ No3 (95m × 1 挿図第4図)

調査当時までは桑園であったが、ブルドーザーによって三方の農道側の高いところから土を運んで整地したと云われているところで、南側の3分の1は耕土の下は黒褐色ローム及び黄褐色ローム様火山灰層が残存し、北側3分の1も耕土下に黄褐色ローム様火山灰層と上の黒褐色ロームが残っている状況であった。中央部では耕土の下は整地のために運ばれた層がブロック状に1m前後存し、その下に旧状をとどめる層が認められた。

採取した遺物は、耕土中から農具の傷痕がみとめられる弥生時代後期の土器片数個があるのみである。

4. N-Sトレンチ No4 (36m × 1 挿図第4図)

第Ⅲ地点の南側で乳牛用牧草を栽培していた畑地で、分布調査で遺物は採集していない上、草地化のため整地された所であるが試掘を実施したものである。

その結果、トレンチの南端は実際に観たことと変ることなく、粘土層が一部耕土化し、下部には、小礫層が認められた。全体的には、この層を基盤に黄褐色ローム様火山灰層、黒褐色ローム層が若干の傾斜をもって堆積していたものとみられ、整地によって切除されたことは断面図で判読され得るものと考えられるのである。

なお、このトレンチの調査にあっては、遺構・遺物ともに確認されなかったが、この畑地一面の地表観察でも同じような傾斜で土地の状況からして、遺物包含層は存しないものと推定される。

5. N-Sトレンチ No5 (80m × 1 挿図第4図)

第Ⅱ地点の南側の桑畠に設定したものである。この畑地の傾斜はN-SトレンチNo.4を設定した畑と同じような傾斜地で、南側半分は地表に黒褐色ローム様火山灰層が顕出していたが、北側との略中間に畦畔があったようで、わずかにその形状をとどめている。北側では第Ⅰ地点と第Ⅱ地点の間を週って、第Ⅲ地点からN-SトレンチNo.3の中程に至る浅い凹部があったとみられる地形を呈している。

南側略3分の1は黄褐色ローム様火山灰層(4B)が基盤にあって、上部はこの土層が耕土化さ

れている。残りの3分の2については一部で土層がカットされていると推定されるところもあるが、大部分は旧状のままであった。ただ耕土に細砂及びアズキ大の軽石が若干含まれており、凹地のため雨水が流入していたことを証している。

遺物はトレンチの中からは皆無であり、壁面にあっても遺構を推定する徵候はみられなかった。

6. N-Sトレンチ No6 (50m × 1・挿図第4図)

当初から不要と考えていたが、第I地点上位の桑園に設定したもので、南側の1~7は粘土層が耕土として利用され、9~10は黒褐色ローム層・黄褐色ローム様火山灰層の下に細砂を含む黒色ローム層が一部に認められ、遺物包含層は認められなかった。

7. E-Wトレンチ No1 (97m × 1・挿図第4図)

このトレンチは、南の凹地へ緩傾斜する最も高いところに設定したものであるが、第III地点に接する東側にあっては、耕土の色あいや地形から遺構や包含層の存在は望まれそうになかった。しかし、中程から東へかけて現況の地形と土層の傾斜を考慮して、古い地形がそのまま残存すると判断したので、下段の弥生時代後期の遺物を採集した畑地の末端まで通じて調査することにした。

西側から約10mのところまでは、耕土の下は黒褐色ローム及び黒褐色ローム様火山灰層が認められたが、これより東側はこの畑地の末端まで、一部で黒色火山灰層及び黄褐色火山灰層が失われていた他は、確実な土層が存在することが確認された。

次いで、下段の畑地は法に近いところから削平したあと上部畑地の畦畔が崩れたらしく、黒色火山灰層と灰青色ロームと黒褐色ロームの塊りが混在している部分がみられた。大部分は上記の1または2層が北側の凹地に動かされたらしく、下部では安定した層がみられた。

しかし、東端に近いところは耕土の下にシラス層が顕出して、上層の流失を如実に示していた。

このトレンチでは、西端から約49mの黒褐色ローム層の下位、約59mの黄褐色ロームとバミス・灰青色ローム層の混在した掘り方らしい断面の下位、約63mの灰青色ロームの上部の三ヵ所で縄文土器の包含されているのが確認された。

8. E-Wトレンチ No2 (61m × 1・挿図第4図)

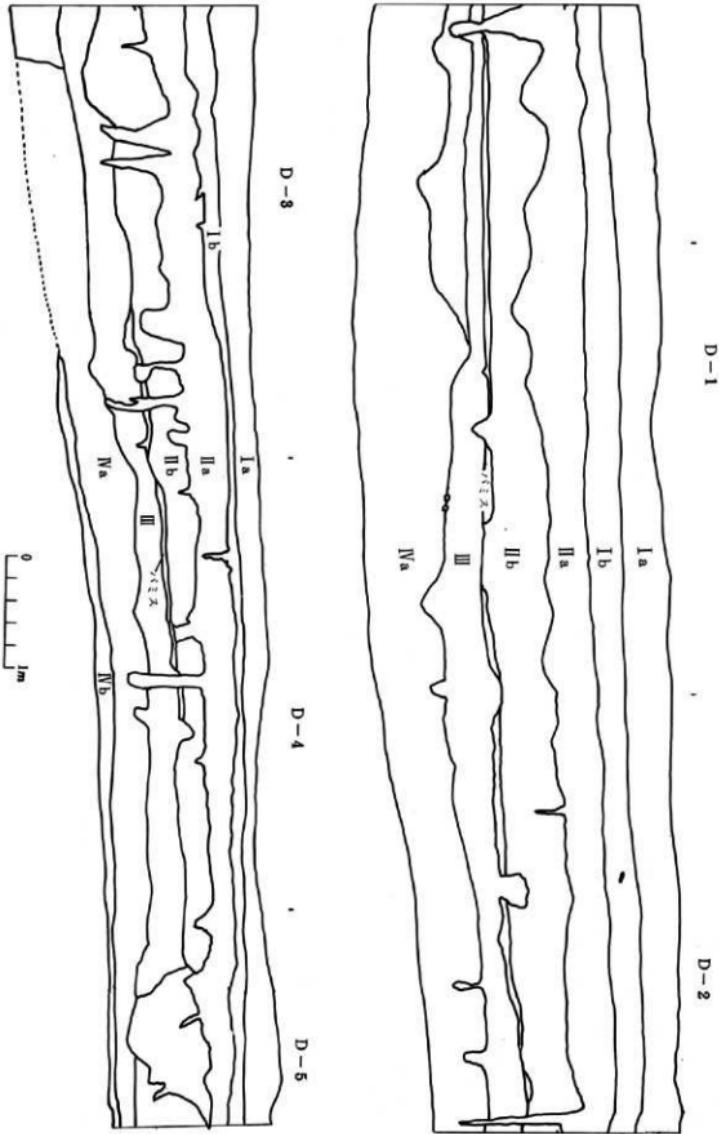
第II地点東側に設定したもので、比較的緩傾斜の畑地と傾斜のある畑の2枚が含まれる。第II地点は殆んど削平されて包含層を見ることは出来なかったが、先端部における遺構・遺物の存否のために調査した。

上の畑地は西端部で黒褐色ローム層、黒褐色ローム様火山灰層を残して上層は欠失しているが、東側では黄褐色ローム層までは残存することが判明した。

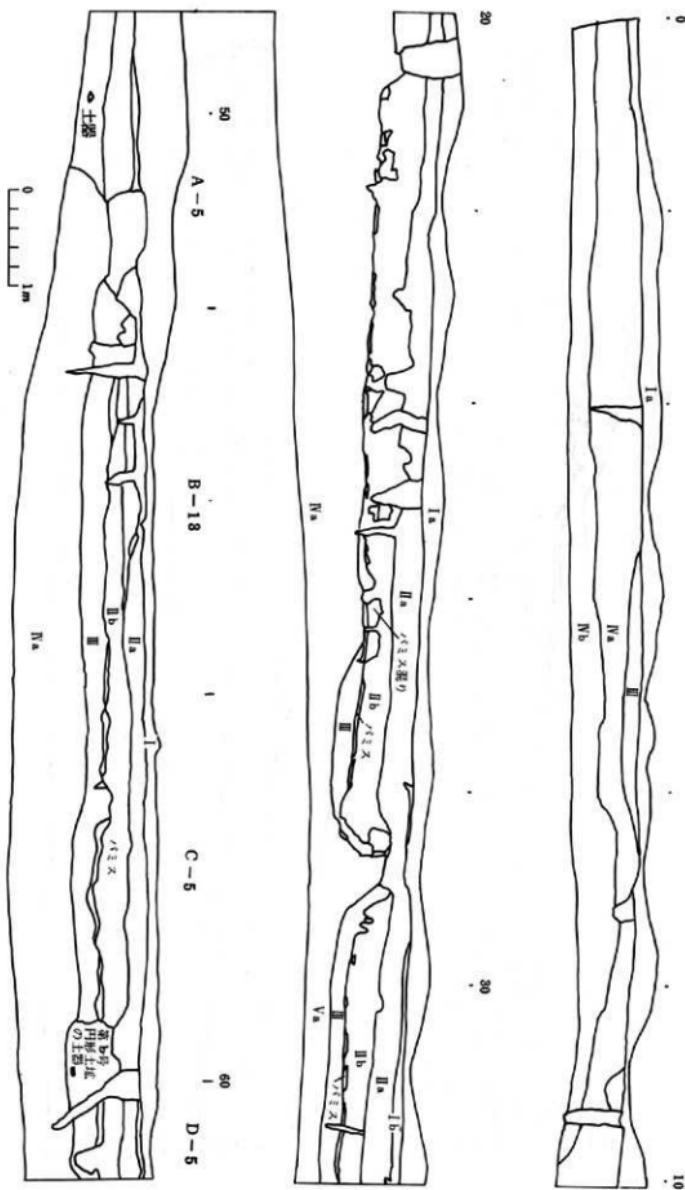
これに対して、下段で傾斜のある畑地では、耕土の下に黒褐色ロームを最上位とする部分、耕土下に黄褐色ロームから下層の認められるところのほか、末端部では黄褐色火山灰層・黒色火山灰層の他、暗褐色火山灰層が流れで堆積したような状況が見られる。

なお、このトレンチにあっては遺物等の採集すべきものは認められなかった。

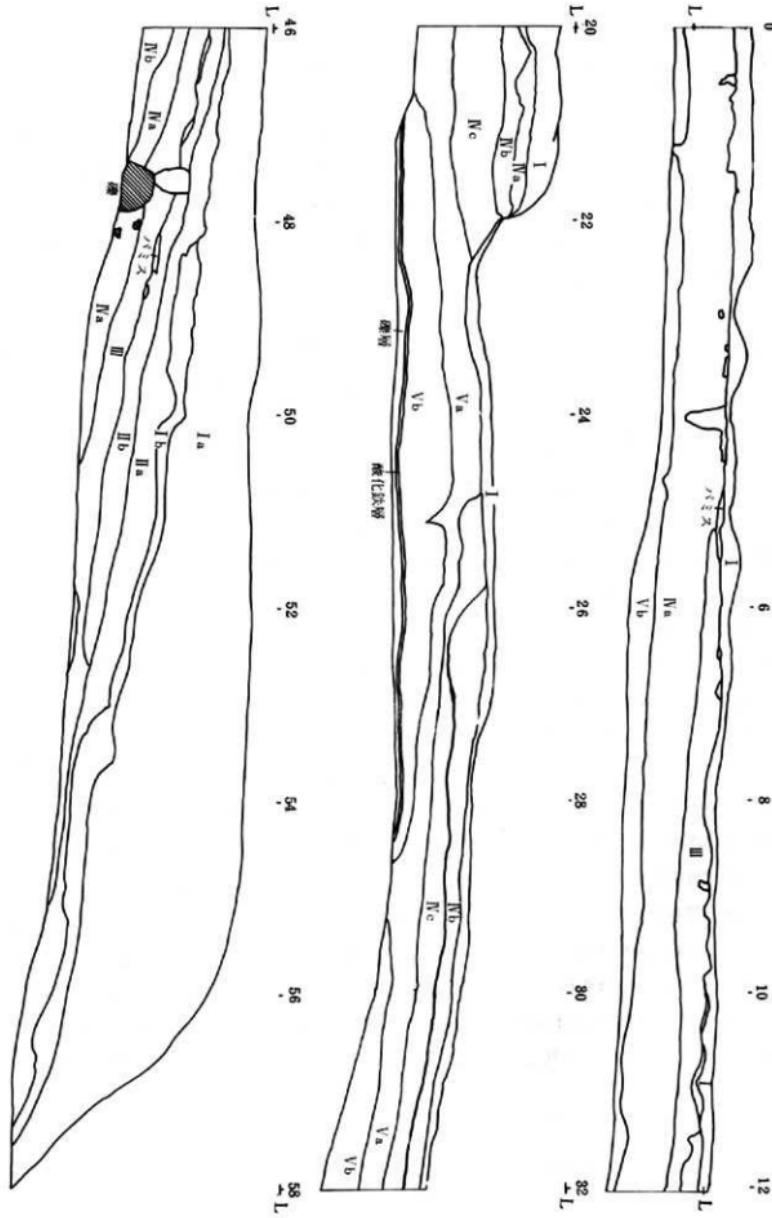
以上、各トレンチについて概略したが、第1・2次の分布調査をはじめ、調査期間中の意的
に耕土の色あいの変化や畦畔の状況等を含む観察、前耕作者でしかも作業員として来た人々、或
いは前土地所有者からの聴取り等で旧地形で近時失われていた部分、現地形の中で生きていると
される地点については、殆んど熟知するに近く、遺構・遺物の存する可能是余りなかったが、諸
般の戦しい事情を考慮すると共に、最終的な確認調査を実施したものである。



第49図 N-Sトレーンチ No.1 土層断面図



第50図 E-Wトレンチ No.1 土層断面図



第51図 E-Wトレンチ No.2 土層断面図

石鎚

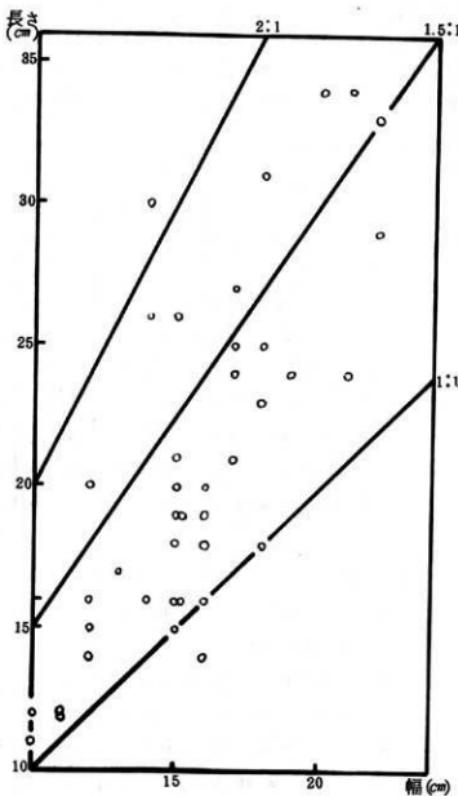
総数58点出土しており、すべて無茎打製石鎚である。地点ごとに、IV地点4個、V地点10個、VI地点33個、VII地点11個を数える。石材は、黒曜石が43点と出土石鎚中74%を占めており、他に安山岩・チャート・頁岩・たん白石・石英などがある。形態的には、大きく平基式のもの(Ⅰ類)と凹基式のもの(Ⅱ類)とに分かれ。Ⅱ類については正三角形に近いもの(a)と、二等辺三角形に近いもの(b)がある。また、主要剝離面を残すもの(3・9・15・18・20・26・28・33・37・47)、鋸歯鎚あるいはサメ歯鎚といわれる細かい調整痕のみられるもの(22・23・32・38・40・48・56・61)なども、かなりの比重を占めている。基部の抉り部分が円形あるいは梯形をした鍬形鎚も多い(2・10・13・19・21・23・24・36・41・45・61)。

次に、これらの計測値について検討してみたい。長さは11cmの細石鎚から、34cmを測る長身鎚まであり平均値(50個)は20.7cmを測る。長さ15cm未満のいわゆる細石鎚は8個を数える。幅は10cmから22cmを測り、平均値(43個)は15.9cmである。厚さは2cmの薄いものから6cmの厚いものまであり、3~4cmのものが65.5%を占める。重さは0.15gの細石鎚から3.2gの大形鎚まであるが、1g未満のものが65.9%と圧倒的に多い。また、長さと幅の比率については、表に示したように0.88という数字が示すような幅広いもの(27)から、2.14といった細長いもの(49)まで種々あるが、1.5以上のものは22.5%と少なく、大勢としては細身のものより幅広のものが多いことが伺える。(第57図)

当遺跡の土器は、縄文時代前期のものが大部分を占め、かつ石鎚の出土層をみても包含層出土のものが多い。鹿児島県ではこれまで石鎚を多量に出土した例は、いくらか(例えば、加世田市上加世田遺跡・金峰町上焼田遺跡など)知られているが、報告書が未刊のため詳細は不明である。ここでは、この石鎚の特徴を整理し、気付いた点について書き留めたい。第1に、若干の例外はあるが、ほとんど縄文時代前期のものである。第2に、石材は黒曜石が圧倒的である。第3に、調整が細やかで、サメ歯鎚もかなりの比重を占め、鍬形鎚も多い。第4に、幅広いものが多く、細石鎚も存在する。以上のうちで鍬形鎚・細石鎚の存在は、他県の様相では古い時期を示すようであるが、当遺跡では19点(33%)もあり簡単に混在物と片づけることはできない。また、多くのサメ歯鎚が存在する遺跡は、類例をあまりみないが、頬娃町北手牧遺跡では轟式土器・春日町式土器に伴って多くのサメ歯鎚が出土している。サメ歯鎚は晩期の遺跡でも時たま見ることがあり、いちがいに規定するには資料不足だが、北手牧遺跡だけではなく、他の前期に属する遺跡でも見ることがあり(例えば吹上町今木場遺跡)、剝離技術も細かく行われており、縄文時代前期の遺跡に多く出土するようである。今後こうした資料のつみ重ねにより、時期による石鎚の形態差も明らかになってくるだろう。

註『頬娃町郷土誌』 昭和50年

番号	出土地点	No.	出土区位	層位	石質	長さ	巾	厚さ	重さ		番号		出土地点	No.	出土区位	層位	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	
1	N	1	P(10-11-12)	3	チャート (砂岩?)	20	16	3	0.5		33	W	17	R-22	3	黒曜石	10	2	0.15	剥片		
2	*	2	表 採	*	チャート (砂岩?)	24	13	3	0.65	欠 球形	34	*	18	H-21	*	*	16	15+2	4	0.6	欠	
3	*	3	*	*	黒曜石	17	13	4	0.9	剥片礫	35	*	19	S-11	4	黒曜石	13	3	0.45	欠		
4	*	4	*	*	石英?	27	17	6	3.2		36	*	20	I-25	3	*	24	15	4	0.8	欠 球形	
5	V	1	B-5.4		黒曜石	25	17	4.5	1.0		37	*	21	K-24	3	*	13	4	0.4	剥片 欠		
6	*	2	*	*	*	15	15	2	0.4		38	*	22	J-23	3	*	30	15	3	0.7	欠 サメ齒	
7	*	3	*	*	チャート	33	15	7	3.35	未製品?	39	*	23	H-21	3	*	19	15	5	0.8		
8	*	4	B-4.4		*	18	18	4	0.95		40	*	24	F-17	3	*	24	21	4	1.5	サメ齒	
9	*	5	*	*	黒曜石	16	12	4	0.45	剥片礫	41	*	25	Q-17	3	*	34	21	5	3.1	球形	
10	*	6	A-4.4		チャート	16	15	3	0.5	球形	42	*	26	E-21	3	*	33	22	5	2.6		
11	*	7	C-3.4		黒曜石	24	19	6	1.95		43	*	27	H-14	3	*	26	19+2	4	1.5		
12	*	8	E-9.4		頁岩	20	12	3	0.5		44	*	28	E-6	1	*	14	12	3	0.5		
13	*	9	C-9	3	黒曜石	16	14	5	0.95	球形	45	*	29	E-7	1	鞍山岩	42	14	3	0.25	欠 球形	
14	*	10	表 採		チャート	端欠 ¹⁹ ₍₊₇₎	15	3	1.45	欠	46	*	30	表 採		黒曜石	12	11	3	0.25	欠	
15	*	11	*	*	黒曜石	13+?	?	3	0.4	欠 剥片礫	47	*	31	*	*	*	12	11	3	0.25	剥片石器	
16	*	12	*	*	*	20	12	7	1.35	他の石器	48	*	32	*	*	*	15	12	2	0.2	サメ齒剥片	
17	W	1	S-13	3	チャート	31	18	4.5	1.2		49	*	33	*	たん白	6	30	14	5	1.1	欠	
18	*	2	R-14	*	黒曜石	10	3	0.25		剥片	50	*	34	E-1	1	流 線	52	27	7	8.7		
19	*	3	*	*	*	?	?	4	0.86	欠 球形	51	*	35	*	1	チャート	54	31	8	16.5		
20	*	4	R-15	*	*	18	15	4	0.86	剥片	52	W	1	C-6	3	周環石	21	17	4	0.8		
21	*	5	O-15	*	*	17	?	5	0.55	欠 球形	53	*	2	B-6	3	石英?	16	15	3	0.4		
22	*	6	N-16	*	*	26	15	3	1.1	サメ齒	54	*	3	B-5	3	黒曜石	24+2	?	6	1.15	欠	
23	*	7	O-19	*	*	16	12	3	0.42	*サメ齒欠 球形	55	*	4	C-5	3	*	20	16	4	0.65	欠	
24	*	8	P-20	*	*	29	22	6	3.0	球形	56	*	5	B-4	3	*	20	15	5	0.8	サメ齒	
25	*	9	P-25	*	*	18	16	5	0.8		57	*	6	B-5	3	*	19	16	4	0.6		
26	*	10	T-27	*	*	21	15	4	0.9	剥片	58	*	7	C-3	3	*	23	18	6	1.75		
27	*	11	S-27	3	*	16	15	4	0.7		59	*	8	B-6	3	*	17	16	4	0.65		
28	*	12	P-27	*	*	19	15	4	0.55	剥片	60	*	9	C-6	3	*	29	15+2	3	0.95	欠 サメ齒 くわ形	
29	*	13	*	*	*	25	18	6	2.0		61	*	10	D-7	3	石英?	34	20	3	1.6	-	
30	*	14	L-26	*	*	10+2	16	3	0.4	欠	62	*	11	表 採		頁岩	26	14	4	1.15		
31	*	15	K-23	*	*	14+2	13+2	5	0.6	欠	63	*	12	表 採		石英?	20+2	17	5	0.9	欠	
32	*	16	W-N-13	*	安山岩	24	17	3	0.8	サメ齒												



第52図 石縁の長さと幅の関係



1. 第 I 地点発掘状況



2. 第 I 地点凹地と遺物の出土状況



1. 第 I 地点 A トレンチ耕土下の内黒土師器と磁器の出土状況



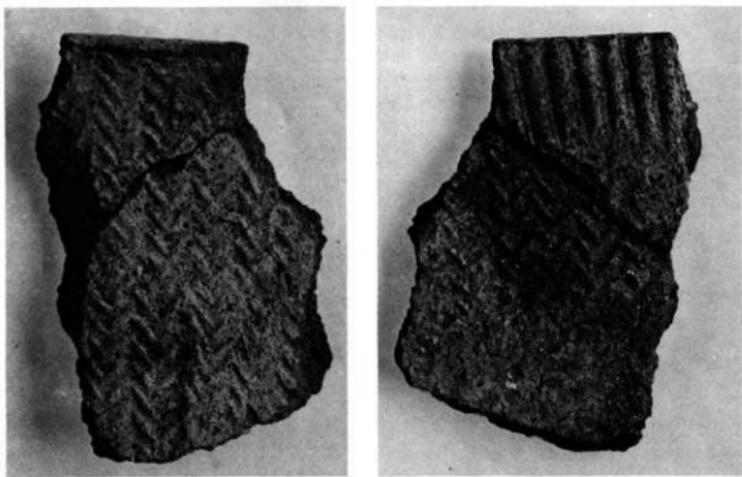
2. 第 I 地点 A トレンチ東側傾斜面の遺物出土状況



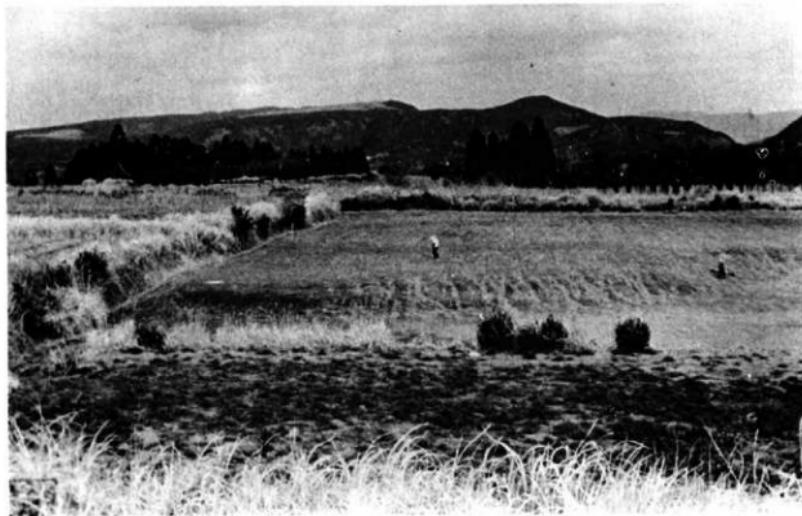
第 I 地点出土遗物



1. 第Ⅱ地点全景



2. I—Iの押型文土器 表（左） 裏（右）



1. 第Ⅲ地點



2. F-Kの岩崎下層式土器破片